

富山大学  
国際交流  
センター

# 紀要

創刊号  
2014年12月

創刊号に寄せて…………… 末岡 宏 1

## I 論文

漢字クラスにおけるグループ練習時の学習者同士のやりとりの分析

—どのような質問、間違いの指摘がなされているか— ……濱田 美和・高畠 智美 3  
〈研究ノート〉

日本の大学で学ぶ留学生の文化変容に関する一考察

—富山大学の場合— ……バハウ サイモン ピーター 13

## II 年報（2013年4月～2014年3月）

1. 指導及び受入・派遣支援…………… 21

2. 日本語プログラム…………… 26

日本語研修コース…………… 27

日本語課外補講…………… 39

総合日本語コース…………… 53

日韓共同理工系学部留学生プログラム…………… 57

日本語学習支援サイトRAICHO…………… 59

3. センター関連行事等…………… 60

4. センター教員等担当業務…………… 63

資料…………… 67



富山大学国際交流センター



紀要

創刊号

2014年12月

# 創刊号に寄せて

富山大学国際交流センター長  
末岡宏

富山大学国際交流センターは、2013年10月に従来の留学生センターを改組して新たに設けられました。それにともなって、研究の一層の発展を期するとともに、この1年のセンターの活動を記録するのにふさわしいものとするために、「国際交流センター紀要」を創刊号として発刊することとなりました。

本センターは富山大学のグローバル化を推進するために、従来の留学生センターの留学生に対する教育・指導に加えて、留学支援チームの業務であった富山大学学生の海外留学の支援を業務のもう一つの柱とすることとなりました。振り返れば、留学生センター設置当初は日本語予備教育が主な業務だったのですが、近年は交換留学生の増加により、日本語教育も総合日本語コースや日本語課外補講にその重点が移っています。昨年度の新センター設置からはそれに加えて、留学に対する相談業務や、留学するために必要な、英語を主とした外国語運用能力を身につける学習の支援も新たに国際交流センターの業務に加わりました。さらにこれまではサービスの提供できる範囲が五福キャンパスにほぼ限られていましたが、新センターでは杉谷キャンパス、高岡キャンパスにもサービスを提供できるよう、文字通りの富山大学の国際交流センターとしての役割が充実するようはかっています。

これらの変化に対応しセンターの機能を充実させるために、センターでは体制の充実につとめています。留学生センターから国際交流センターに改組するにあたっては、残念ながらコーディネーター他数名の事務スタッフが増員されただけで、教育・研究スタッフの増員はかきませんでした。しかし新センターは各部局の教員の協力を得ながら業務を進めることができるようになり、従来からの留学生教育に関する業務の充実はもちろんのこと、新たな留学生派遣業務もしっかりしたものにしていきたいと思っています。今のところ新たなセンターとしての体制は整備の途上ですが、それでも津田コーディネーターをはじめとするスタッフのおかげで海外語学研修の参加者は昨年比べて大幅に増加しました。またこれまでは学生の海外留学には積極的とは言えなかった学部からも、留学したいという学生の要望や、留学できる教育体制を整備したいという相談が、センターに寄せられるようになってきました。

前記のように教育・研究スタッフの充実がかなわなかったため、本紀要に掲載する研究の成果は、これまでの留学生センター紀要と大きく変わりませんでした。それでも国際交流に関する研究が掲載されましたし、年報欄のこの1年間の活動記録には富山大学学生の海外留学に関する記載が加わっています。また年報には記載していないものの、本年度からは国際交流活動が盛んになっています。特筆すべきはセンターで留学生と日本人学生が盛んに交流をすすめられていて、それも教職員が企画したのではなく学生達自身が企画した活動が盛んになっているのは喜ばしいことです。また、それに伴って国際交流センターを訪問する学生が増え、これまでは一部の留学生にしか知られていなかったセンターの存在が、多くの学生・教職員に知られるようになったことは、富山大学の国際交流センターにとって大きな一歩であると言えます。これらの成果は次号の紀要の年報欄でお知らせすることができると思います。この一歩がさらに続く一歩となりますように、またその成果を来年以後の紀要でお知らせできますことを、新国際交流センター長として確信しております。

最後に、これからは各部局の教職員・学生として富山大学の国際化が進むよう、さらなる充実をはかっていきますので、皆様の協力をお願いいたしまして、創刊の辞を結ばせていただきます。

I

論文

# 漢字クラスにおけるグループ練習時の 学習者同士のやりとりの分析

## —どのような質問、間違いの指摘がなされているか—

濱田美和・高島智美

Analysis of the Dialogue between Learners During Group Work in Kanji Class:  
What kind of questions are asked? What kind of errors are pointed out?

HAMADA Miwa, TAKABATAKE Tomomi

### 要 旨

受講者間の漢字の習得状況の開きが大きいため、複式で授業を行っている漢字クラスにおいて、学習者同士で行うグループ練習の活動を取り入れている。グループ練習時の学習者の発話を録音し、それらを文字化したデータをもとに、学習者同士でどのような質問がなされ、どのような間違いに対して指摘がなされているか、そして、それらに対してどの程度適切に修正がなされているかを観察した。質問については解答、練習方法、漢字・漢字語、出題内容にかかわる質問が見られ、間違いについては漢字・漢字語、練習方法、文法にかかわる間違いが見られた。数としては漢字・漢字語の読み間違いが最も多かった。全体的にはグループのメンバーから適切な返答や間違いの訂正がなされているもののほうが多かったが、漢字・漢字語の読みについては学習者同士のやりとりの中では間違いに気づかないままものや間違った答えが与えられているものも多く見られた。

【キーワード】 漢字クラス、日本語学習者、教材開発、グループ練習、やりとり

## 1 はじめに

受講者間の漢字の習得状況の開きが大きいため、習得状況別に2～4のグループに分け、グループごとに異なる教科書を選定して、複式授業を行っている漢字クラス<sup>1)</sup>において、教師の指導の効率化と自習時間の有効活用を主な目的として、2009年度前期から日本語学習者（以下、「学習者」）同士によるグループ練習の活動を取り入れている。

グループ練習では、学習者がそれぞれ2～3人のグループを作り、教師の援助なしで学習者だけで使用教科書の各課の要点にかかわる課題に取り組むことになっている。グループ練習用の補助教材（ワークシート、カード、タブレット端末）を用いて、学習者同士で学習漢字や漢字語について出題・解答し合ったり、与えられた問題に対して相談して解答を求めたりする。

濱田・高島（2013）では、練習活動の充実のため、練習時の学習者の発話を録音し、それらを文字化したデータをもとに分析した。そして、練習の過程で誤りが生じた場合のやりとりを見てみると、漢字語の意味的共起性にかかわる間違いへの指摘はほとんどなされていないものの、漢字・漢字語の読みや意味の誤りについては学習者同士で修正し、知識を深められているという結果を報告した。ただし、先行研究では、データ数がまだ十分でなかったこともあり、全体的な傾向を見るにとどまり、詳細な分析は今後の課題としていた。本稿では、新たなデータを加えた上で、学習者間でどのような質問がなされ、また、どのような間違いに対して指摘がなされているか、そして、それらについてどの程度適切に修正がなされているのかを見ていく。

## 2 調査の概要

2012年度前期・後期および2013年度前期に開講した中・上級レベルの学習者向けの漢字クラスで、グループ練習における学習者の発話を録音した。グループ練習の内容はいずれも、教科書に沿って教師が導入した漢字・漢字語の定着を図るために行うものである。1つのグループの構成員は2～3人で、学習者の1人が問題やヒントを出して他の学習者が答えるものと、学習者同士で相談・協力しながら答えを考えるものがある。今回は、日本語能力試験N3レベル(『漢字1000plus INTERMEDIATE KANJI BOOK』vol.1(凡人社)を教科書として使用)の6人の学習者(韓国2人, ベトナム2人, ロシア2人)による延べ18のグループ練習と、N2レベル(『漢字1000plus INTERMEDIATE KANJI BOOK』vol.2(凡人社)を教科書として使用)の11人の学習者(中国4人, ロシア4人, 韓国2人, ブラジル1人)による延べ36のグループ練習中の発話を録音(N3レベルが計5時間36分, N2レベルが計8時間48分)・文字化し<sup>2)</sup>, 文字化したデータ<sup>3)</sup>をもとに学習者間でのやりとりの詳細を観察した。

## 3 分析方法

分析の手順は次の通りである。まず、学習者の発話のうち、「グループのメンバーに質問する発話(以下、「質問の発話」)」と「グループ練習の方法および練習内容に関して間違いを含む発話(以下、「間違いの発話」)」を抽出した。次に、それらの発話の直後に続くグループのメンバーの発話を観察し、質問の発話については、メンバーから適切な答えを与えられている場合を「修正あり」、メンバーから間違った答えを与えられたり返答がなかったりする場合を「修正なし」とした。間違いの発話については、これに続く発話でグループのメンバーもしくは間違えた本人が適切な情報を提示できている、あるいは、直後に教材で示された解答を見て間違いに気づいた場合を「修正あり」、グループのメンバーも間違えていたり間違いに対して何も反応がない場合を「修正なし」とした。なお、本稿では、学習者同士のやりとりについて分析を行うため、教師あるいは授業補助者が学習者の質問に答えたり間違いの修正を行った発話は分析の対象から外した。

## 4 分析結果と考察

日本語能力試験N3レベルの学習者のグループ(以下、「N3グループ」)と、N2レベルの学習者のグループ(以下、「N2グループ」)に分けて分析した。

まずN3グループでは、質問の発話が94件、間違いの発話が190件で、間違いの発話のほうが2倍近く多かった。質問の発話は94件のうち、修正ありが85件(90.4%)、修正なしが9件(9.6%)で、大半が学習者同士で修正がなされていた。間違いの発話は190件のうち、修正ありが110件(57.9%)、修正なしが80件(42.1%)で、半数以上修正がなされていた。

次にN2グループでは、質問の発話が400件、間違いの発話が183件で、質問の発話のほうが2倍以上多かった。質問の発話は、400件のうち、修正ありが346件(86.5%)、修正なしが54件(13.5%)で、N3グループと同様に大半が学習者同士で修正されていた。間違いの発話は、183件のうち、修正ありが45件(24.6%)、修正なしが138件(75.4%)で、多くが修正されないまま練習が進められていた。

以下、4.1で質問の発話、4.2で間違いの発話について、それぞれどのような内容の質問や間違いがあったか、そして、それらについてどの程度適切に修正がなされているのかを述べる。

### 4.1 質問の発話

質問の発話は、(1)練習方法にかかわる質問、(2)出題内容にかかわる質問、(3)解答にかかわる質問、(4)漢字・漢字語にかかわる質問の4つに大きく分けられる。表1に(1)~(4)それぞれの修正ありと修正なしの件数を、表2に学習者同士のやりとりの例の一部を示す。

表1 質問の発話における修正ありと修正なしの件数

質問内容		N3グループ			N2グループ			計
		修正あり	修正なし	小計	修正あり	修正なし	小計	
(1)練習方法にかかわる質問	a) 練習方法について質問・確認	14	0	14	30	7	37	51
	b) 練習を進めていいか確認	7	1	8	5	0	5	13
	c) 順番について質問・確認	3	0	3	13	0	13	16
	小計	24	1	25	48	7	55	80
(2)出題内容にかかわる質問	a) 出題内容について質問・確認	8	0	8	19	1	20	28
	b) 出題内容を考え終えたか確認	0	0	0	5	0	5	5
	c) 出題内容を理解できたか確認	1	0	1	0	0	0	1
	d) 出題内容の難易度を確認	1	0	1	0	0	0	1
小計	10	0	10	24	1	25	35	
(3)解答にかかわる質問	a) 解答のヒントを求める質問	2	0	2	9	0	9	11
	b) 正解がどれかを質問・確認	4	0	4	13	6	19	23
	c) 自分の考えた解答を確認	12	0	12	183	21	204	216
	d) 解答のカードについて質問	9	0	9	1	1	2	11
	e) メンバーのワークシートの解答を質問・確認	0	0	0	9	2	11	11
	f) 解答を考え終えたか確認	2	0	2	3	0	3	5
	g) メンバーの言った解答を確認	0	0	0	16	1	17	17
	h) メンバーの点数を確認	4	0	4	0	0	0	4
小計	33	0	33	234	31	265	298	
(4)漢字・漢字語にかかわる質問	a) 読みについて質問・確認	6	3	9	16	5	21	30
	b) 意味について質問・確認	8	4	12	14	7	21	33
	c) 使用漢字について質問・確認	1	0	1	4	0	4	5
	d) 使用漢字語について質問・確認	3	0	3	4	0	4	7
	e) 用法について質問	0	0	0	1	1	2	2
	f) 意味的共起性について質問	0	0	0	0	1	1	1
	g) 学習方法について質問	0	0	0	1	0	1	1
	小計	18	7	25	40	14	54	79
(5)何にかかわる質問か不明なもの	0	1	1	0	1	1	2	
計	85	9	94	346	54	400	494	

表2 質問の発話における学習者同士のやりとりの例

(1a)練習方法について質問・確認 A:これ、戻しますか B:うーん、わかりません A:あ、戻すんだ B:ああ、そうですか、じゃ	(2a)出題内容について質問・確認 (Aは出題者, Bは解答者) A:1つ目の漢字の訓読みは「やわらかい」 B:2つ目? 1つ目? A:1つ, 1つ, 1つ	(3a)解答のヒントを求める質問 (Aは出題者, Bは解答者, カードの中にその語があるかを質問している) A:希望と似ています, 意味が B:ここにあるの? A:わたしの目には見えるよ B:対策? A:いや, いや
(3c)自分の考えた解答を確認 (Aは出題者, Bは解答者) A:えー, 政権の外にいる政党 B:あー, うーん, 与党? A:ほか B:野党 A:野党	(4a)読みについて質問 (「裕福」の読みについて質問している) A:あの, 音読みは? B:ユウフク C:ユウフク A:ユウフ B:ユウが長い C:フク A:ユウフク, ユウフク	(4b)意味について質問 A:分布は B:分布ってつまるどころ? A:いえいえ B:じゃない? A:えーっと, Distribution B:あ, そうなの A:はいはい



### (1) 練習方法にかかわる質問

練習方法にかかわる質問では、(1a)グループ練習の方法がわからずにグループのメンバーにたずねるものの他に、(1b)練習を進めてよいかメンバーにたずねる発話、(1c)次の順番がだれかを質問・確認する発話が見られた。

N3グループでは、修正なしは(1b)で1件だけだったが、これは出題者が次のヒントを出してよいかメンバーにたずねた直後に、そのメンバーがこれに対する返答をせずに自身の考えた解答を述べたもので、これ以外の質問では、すべてメンバーとのやりとりの中で答えを得ることができていた。

N2グループでは、(1b)と(1c)についてはすべて適切な返答がなされていたが、(1a)では修正なしが7件あった。7件の内訳は、メンバーから返答がなくそのまま練習を続けているものが3件、間違っただけの方法を提示されたものが4件だった。また、修正なしの大半(7件中6件)は、カードを1枚ずつ引くべきところを最初に全部配ってしまったなど、練習の進行自体を妨げるような大きな間違いではなかったことから、後で間違いに気づいて練習方法の修正を行っている場合も1件あったが、この他は教材の指示とは異なる方法でそのまま練習を進めていた。修正なしの中に1件、方法が不明なままでは練習の進行に支障をきたすものがあったが、これについては後で授業補助者(日本人大学院生)に確認していた。

### (2) 出題内容にかかわる質問

出題内容にかかわる質問では、(2a)解答者が出題者に出題内容を質問・確認する発話や、教材の設問の意味をメンバーに質問・確認する発話、(2b)学習者自身で設問を考えて出題するタイプの練習において、出題内容を考え終えたかメンバーに確認する発話、(2c)出題者が解答者に出題内容を理解できたか確認する発話、(2d)解答者が出題者に出題内容の難易度をたずねる発話が見られた。

N3グループでは、出題内容にかかわる質問についてはすべて適切に返答がなされていた。

N2グループでは、修正なしが(2a)で1件あった。これは与えられた例文の意味をメンバーに質問したもので、この後しばらくメンバー間で意味を確認するやりとりが続いたものの、最後まで正しい文意にたどりつくことはできなかった。これ以外の出題内容に関する質問や確認は、学習者同士で適切に解決することができていた。

### (3) 解答にかかわる質問

解答にかかわる質問では、(3a)解答者が出題者に解答にかかわるヒントを求める発話、(3b)出題者やメンバーに正解がどれかを質問・確認する発話、(3c)自分の考えた解答が正しいか確認する発話、(3d)解答のカードの有無や場所をたずねる発話、(3e)各自が異なる内容のワークシートを完成させた後で情報交換を行うタイプの練習において、メンバーのワークシートの解答を質問・確認する発話、(3f)メンバーに解答を考え終えたか確認する発話、(3g)メンバーの言った解答を確認する発話、(3h)メンバーの点数や取ったカードの枚数を確認する発話が見られた。

N3グループでは、解答にかかわる質問についてもすべて適切に返答がなされていた。

N2グループでは、(3a)と(3f)はすべて適切に返答がなされていた。(3b)～(3e)と(3g)では適切な返答がなされているもののほうが多かったが、一部修正なしのものがあった。修正なしについて詳しく見ていくと、まず、(3b)の全6件、および、(3c)の21件中19件は、メンバーで協力して解答を求めるタイプの練習において、正答がどれか、自分の考えた解答が正しいかを質問・確認したものの、質問を受けたメンバーも正答を知らないために適切に返答できなかったものである。なお、これらの練習では練習終了後に教材の一部として正答を示している。次に、(3c)の残りの2件は、学習者が自身で例文を作成して出題するもので、いずれも作成した例文が不適切なものであったため、正答を誤答に、あるいは誤答を正答にしてしまったものである。(3d)の1件は、カードを組み合わせて語を作成する練習において、「カードが足りないのではないか」という質問に対して同意する返答をしたもので、その後練習を進める中で十分なカードがあることに気づいていた。(3e)の2件は、異なる内容のワークシートを持つメンバーが互いに情報を交換しながら各自の解答を考えるタイプの練習において、メンバーのワークシート

の解答をたずねたものの、そのメンバーがまだ解答を考えていなかったことから返答できなかったものである。(3g)の1件は、メンバーの解答を確認する発話の直後に教師からクラス全体に対する案内があったため、返答がないままとなってしまったものである。

#### (4) 漢字・漢字語にかかわる質問

漢字・漢字語にかかわる質問では、(4a)読みについて質問・確認する発話、(4b)意味について質問・確認する発話、(4c)どの漢字を使用するかを質問・確認する発話、(4d)漢字を組み合わせて語を作る練習で自分が作った語が正しいかを確認したり、自分の言いたい語が出てこないときに類義語などを示して質問する発話、(4e)漢字語の品詞など用法を質問する発話、(4f)2つの語が意味的に共起するかを質問する発話、(4g)漢字や漢字語の学習方法を質問する発話が見られた。

N3グループでは、(4a)の読み、(4b)の意味、(4c)の使用漢字、(4d)の使用漢字語について質問・確認する発話が見られた。このうち、(4c)の使用漢字と(4d)の使用漢字語については、学習者の質問・確認の発話に対して適切に返答がなされていたが、(4a)の読みと(4b)の意味については適切な返答がなされていたもののほうが多いものの、一部で修正なしがあった。修正なしについて詳しく見ていくと、まず、(4a)の読みの3件中2件は、メンバーから間違った答えを与えられたもので、1件は返答がなかった。次に、(4b)の意味の全4件は、メンバーからの返答がなかった。返答なしについては、他のメンバーも設問を読んだり解答を考えるなど自身の作業に集中していて質問されたことに気づいていない様子だった。

N2グループでは、(4c)の使用漢字、(4d)の使用漢字語、(4g)の学習方法についてはすべて適切に返答がなされていた。(4a)の読みと(4b)の意味では、適切に返答されているもののほうが多いが、一部で修正なしが見られた。(4a)の読みの5件中4件はメンバーから間違った答えを与えられたもので、1件は返答がなかった。(4b)の意味の8件中2件は間違った答え、1件は「わからない」という返答、5件は返答がなかった。(4e)の用法については修正ありと修正なしがそれぞれ1件で、修正なしの1件は返答内容が不十分だった。(4f)の意味的共起性については修正なしが1件で、不適切な答えを与えられていた。返答なしには、グループのメンバーも正しい答えがわからないために返答できない様子のもので、自身の解答を伝えるのに夢中で質問されたことに気づいていない様子のものであった。

以上の結果をまとめると、N3グループでは、質問の発話については大半が適切に返答がなされていたが、漢字・漢字語の読みについては、一部メンバーから間違った答えを与えられている場合があった。そして、漢字・漢字語の意味については、質問してもメンバーからの返答がないままのものが複数見られた。ここで再度質問しなかったのは、意味については自身で教科書や電子辞書で調べやすいことも影響していると思われる。また、グループ練習を一通り終えた後で、同じ質問を教師に対して行っている学習者もいた。

N2グループでは、多くが適切に返答がなされていたが、解答にかかわる質問をはじめ、漢字・漢字語にかかわる質問、練習方法にかかわる質問それぞれで、学習者同士では解決できていないものが一定数あった。N2グループで特徴的なのは、解答にかかわる質問のうち自分の考えた解答が正しいかどうかを確認する発話が半数を占めており、N3グループに比べてかなり多かったことである。大半は学習者同士で適切に確認がなされていたが、中には正解かどうか確認されないままのものもあった。N2グループでは解答を練習終了後にまとめて確認するタイプの教材が多いのに対して、N3グループでは設問ごとに解答を確認できるタイプの教材が多く、このことが両者の違いに結びついたものと思われる。次に、漢字・漢字語にかかわる質問で、メンバーから間違った答えを与えられたり返答がなかったものが複数見られたのは、N3グループと同様に、読みと意味についての質問だった。N2、N3グループあわせて、読みにかかわる質問が30件、意味にかかわる質問が33件で、漢字・漢字語にかかわる質問の8割(79件中63件)を、読みと意味にかかわる質問が占めている。質問数自体の多さも修正なしの件数が他と比べて多いことと関係していると思われる。最後に、練習方法にかかわる質問で適切な返答がなされなかったものは、手順が複雑な練習におけるものであった。

## 4.2 間違いの発話

間違いの発話は、(6)練習方法にかかわる間違い、(7)漢字・漢字語にかかわる間違い、(8)文法にかかわる間違いの3つに大きく分けられる。表3に(6)~(8)それぞれの修正ありと修正なしの件数を、表4に学習者同士のやりとりの例の一部を示す。

表3 間違いの発話における修正ありと修正なしの件数

質問内容		N3グループ			N2グループ			計
		修正あり	修正なし	小計	修正あり	修正なし	小計	
(6)練習方法にかかわる間違い	a) 出題・設問作成方法の間違い	2	0	2	0	0	0	2
	b) 解答方法の間違い	2	0	2	0	0	0	2
	小計	4	0	4	0	0	0	4
(7)漢字・漢字語にかかわる間違い	a) 読み間違い	36	68	104	26	100	126	230
	b) 意味の間違い	19	0	19	0	10	10	29
	c) 使用漢字の間違い	3	0	3	2	0	2	5
	d) 使用漢字語の間違い	32	4	36	14	9	23	59
	e) 用法の間違い	2	3	5	0	2	2	7
	f) 意味的共起性の間違い	0	2	2	1	8	9	11
	g) 字形の間違い	7	0	7	2	0	2	9
	h) 聞き間違い	2	0	2	0	0	0	2
	i) 何の間違いか不明なもの	3	2	5	0	0	0	5
	小計	104	79	183	45	129	174	357
(8)文法にかかわる間違い	a) 助詞の間違い	1	0	1	0	7	7	8
	b) 活用の間違い	1	1	2	0	2	2	4
	小計	2	1	3	0	9	9	12
計		110	80	190	45	138	183	373

表4 間違いの発話における学習者同士のやりとりの例

(7a)読み間違い	(7c)使用漢字の間違い	(7d)使用漢字語の間違い
(※「探知」の読み) A: テンチ B: テンチ, テンチ, うんうん, テンチじゃない, さがす (しばらく間) B: タンチ A: タンチ	(Aは出題者, Bは解答者, AはBの「足が速い」を「足が早い」と書いた間違いを指摘している) A: ん? あ, はやいの漢字2つあるじゃない。 B: あ A: これ, これ, 使わないです B: ああ	(Aは出題者, BとCは解答者) A: 本を買う, 本を買うのにかかるお金です (中略) B: 本料 C: 本料 A: 違う, 本代 B: 本代
(7e)用法の間違い	(7f)意味的共起性の間違い	(7g)字形の間違い
(Aは出題者, Bは解答者) A: コウ, うーん, 高慢, 高慢は人を寂しくする B: コウマン? A: 高慢 B: ああ	(Aは出題者, Bは解答者, Aは「地震で家具が倒壊した」という例文を考えて出題している) A: 地震で家具が壊れた B: えー A: 倒れた, 倒れた (中略) B: 崩壊する? A: 崩壊じゃない B: じゃない A: 倒壊	(Aは出題者, Bは解答者) A: じゃ, 2番, 日本の交通機関が便利だと思います B: あああああ A: (笑) B: 交通機関 A: (笑) 機は大丈夫 B: 最初の A: えー, これ B: あー, これ中国語の漢字です A: あー, はい



## (6) 練習方法にかかわる間違い

練習方法にかかわる間違いでは、(6a)学習者自身で設問を考えるタイプの練習で出題の仕方や設問作成方法を間違えて出題した発話、(6b)メンバーの解答方法の間違いを指摘する発話が見られた。

N3グループでは、練習方法にかかわる間違いについてはすべてメンバーから適切な情報が示されていた。

N2グループでは、練習方法にかかわる間違いはなかった。

## (7) 漢字・漢字語にかかわる間違い

漢字・漢字語にかかわる間違いでは、(7a)設問や解答を言う際に漢字・漢字語を読み間違えた発話<sup>4)</sup>、(7b)例文に当てはまる語を探したり提示された意味の語を探したりする練習で別の漢字語を間違えて言った発話、(7c)漢字語の読みや例文を見て適当な漢字を選択する練習で解答を見て自身の間違いに気づいたことを述べたり、メンバーが書き間違いを指摘した発話、(7d)漢字・漢字語を組み合わせて熟語や複合語を作る練習で実際には存在しない語を間違えて言った発話、(7e)学習者自身で設問や例文を作るタイプの練習で品詞を間違えて説明したり例文を言ったり、例文に当てはまる語を選択する練習で用法の違いから不適格となる語を間違えて言った発話、(7f)学習者自身で例文を作るタイプの練習で意味的に共起しない語を用いて作成した文を言った発話、(7g)偏と旁などの構成要素を組み合わせて漢字を完成させる練習で実際には存在しない漢字を作り、解答を見て自身の間違いに気づいたことを述べる発話、(7h)他のメンバーの発話を聞き間違えてそのメンバーに聞き返す発話が見られた。(7i)の何の間違いか不明なものは、読み間違いなのか使用漢字語の間違いなのか判断が難しく分類できなかったものである。

N3グループでは、(7b)の意味の間違い、(7c)の使用漢字の間違い、(7g)の字形の間違い、(7h)の聞き間違いについてはすべて適切な情報が与えられていたが、その多くは教材で示された解答を見て気づいたもので、それ以外には、(7c)の使用漢字でメンバーから間違いを指摘されたものが1件、(7g)の字形で電子辞書で調べて気づいたものが1件あった。(7a)の読み間違いについては修正ありが36件、修正なしが68件で、修正なしの件数がかなり多いが、修正なし68件の内訳は、学習者の読み違いに対してメンバーが何の反応も示さなかったものが59件、読み間違いをそのまま繰り返したものが8件、別の読み間違いをしたものが1件で、グループ内で読み間違いに気づかないまま練習を進めていったと思われるものが大半を占めた。修正あり36件のうち、22件はメンバーから正しい読みを与えられたもの、11件は自身で間違いに気づいて言い直したもの、3件はメンバーから聞き返されて間違いに気づいたものだった。(7d)の使用漢字語の間違いについては修正ありが32件、修正なしが4件で、修正ありが大半を占めた。修正あり32件のうち、教材で示された解答を見て間違いに気づいたものが30件、メンバーから指摘されたものが2件だった。修正なし4件のうち3件は学習者自身が作った例文に使われた語で、メンバーも間違っているか指摘が難しかったと思われる。残り1件は間違った時点での練習問題とは直接関係しない語で、練習を進行する上での重要性が低かったことが影響していると思われる。その後、その語に関係する練習問題となった時点では間違えた本人もメンバーも適切な語を発話していた。(7e)の用法の間違いについては修正ありが2件、修正なしが3件で、さほど多くない。修正あり2件はいずれも教材の解答を見て気づいたもので、修正なし3件はいずれも学習者自身が作った設問や例文で見られた間違いだった。(7f)の意味的共起性の間違いは2件と少ないが、2件とも修正なしで、これも学習者自身が作った例文における間違いだった。

N2グループでは、(7c)の使用漢字の間違い、(7g)の字形の間違いについては、学習者同士ですべて適切に修正できていた。(7a)の読み間違いについては修正ありが26件、修正なしが100件で、修正なしが修正ありの4倍近く多かった。修正なし100件の内訳は、学習者の読み間違いに対してメンバーが何の反応も示さなかったものが80件、読み間違えた語についてメンバーが聞き返しはしたものの何の修正も行われなかったものが13件、読み間違いをそのまま繰り返したものが5件、別の読み間違いをしたものが2件だった。読み間違いに気づかない、あるいは、何か不自然さを感じても読み間違いかどう

かを判断できないために、間違いが修正されないまま練習が進行したと思われるものが多くを占めた。修正あり26件の内訳は、メンバーから正しい読みを提示されたものが8件、読み間違いに自身で気づいて修正したものが18件だった。(7b)の意味の間違いについては、10件すべてが修正なしだった。いずれも練習として取り上げた漢字語を誤った文脈で用いたものだが、類似の意味で使っているものが大半で、メンバーも間違いに気づくのが困難だったと考えられる。(7d)の使用漢字語の間違いについては、修正ありが14件、修正なしが9件で、修正ありのほうが多かった。修正あり14件の内訳は、メンバーが間違いに気づいて正しい語に言い直したものが6件、正解を知っている出題者が解答者の間違いを修正したものが6件、自身で間違いに気づいて修正したものが2件だった。修正なし9件の内訳は、メンバーが間違いに気づかず何の反応も示さなかったものが5件、実際に存在しない語であることに気づかず繰り返したものが2件、実際に存在しない別の語を提示して訂正しようとしたものが1件、不自然さを感じて聞き返したものの本当にその語が間違いであるか判断できないまま練習を進めたものが1件だった。(7e)の漢字語の用法の誤りは2件と数は少ないが、いずれもメンバーも間違いに気づかないまま練習を進めており、学習者同士での修正はできていなかった。(7d)の使用漢字語と(7e)の用法についての修正なしは、グループ練習で用意された設問すべてに答えた後でまとめて正答を確認するタイプの教材で見られた。(7f)の意味的に共起性しない語を用いた間違いについては、9件中修正ありが1件、修正なしが8件と、大半が修正なしだった。修正なしはいずれも学習者自身が作った例文での間違いで、メンバーからは何の反応もなく、間違いに気づかなかつたために修正が行われなかったと考えられる。修正ありの1件は学習者同士で出題・解答し合う練習において意味的共起性の誤りを含む解答をしたもので、出題者であるメンバーから修正されていた。

#### (8) 文法にかかわる間違い

文法にかかわる間違い<sup>5)</sup>では、(8a)設問文、例文を読むときに助詞を間違えた発話、(8b)設問文、例文を読むときに動詞の活用を間違えた発話が見られた。

N3グループでは、(8a)の助詞の間違いについてはメンバーから間違いを指摘されていた。(8b)の動詞の活用の間違いは自身で間違いに気づいて言い直したものが1件、修正しないまま練習を進めたものが1件だったが、練習の進行にはほとんど影響しない間違いだった。

N2グループでは、(8a)の助詞の間違いが8件、(8b)の動詞の活用の間違いが2件あったが、いずれも修正なしだった。(8a)の助詞の間違いについては、うち7件が、共起性の高い複数の動詞をヒントに語を選ぶという練習における誤りで、いずれも練習終了後に教材として解答を示している。(8b)の動詞の活用の間違いのうち、1件は例文に用いられた語の品詞と意味を確認する際にその語の活用形を間違えたもの、もう1件は学習者自身が作成した例文で間違えたものだった。

以上の結果をまとめると、N3グループでは、間違いの発話については全体的にメンバーからの指摘や教材で提示された解答によって間違いに気づき訂正できていたものが多かったが、読み間違いについては学習者同士のやりとりの中では間違いに気づかないままのものも多かった。また、実際には存在しない語を作ったり、意味的に共起しない語を用いたりする間違いはいずれも学習者自身で例文や設問を作成するタイプの練習で見られたが、これらについては学習者同士で間違いを指摘している例は見られなかった。

N2グループでは、N3グループと異なり、全体的に学習者同士のやりとりの中では修正されないままのものも多かった。この理由の1つとして、N3グループよりも難易度の高い漢字・漢字語が練習で取り上げられていて、教材に出現する漢字・漢字語の数も多くなるため、間違いに気づきにくいことが考えられる。中でも特に修正なしが多く見られたのが読み間違いで、N3グループと同様、学習者同士のやりとりの中では間違いに気づかないままのものも多かった。次に修正なしが多かった意味の間違い、それから意味的に共起しない語を使った間違いについては、学習者自身が作成した例文の中で、語を違う意味で用いたり意味的に共起しない語を用いたりしたものだ。そして、実際には存在しない

語を作った間違い、用法の間違いについては、練習終了後まで正答を確認できないタイプの教材で、間違いに気づかないまま練習を進めていったものだった。

## 5 まとめと今後の課題

質問の発話については、N3、N2グループともにメンバーから適切に返答がなされているものが大半を占めたが、間違いの発話については間違いに気づかないままのものや返答がなされていないものが増え、特にN2グループでは修正ありよりも修正なしのほうが多かった。中でも修正なしが目立ったのが、漢字・漢字語の読みである。濱田・高島(2014)<sup>6)</sup>で報告したように、修正なしのままとなるのは、特に清音と濁音、長音と清音などの類似音で、一般的に日本語学習者が区別を苦手とするもの、そして、グループ練習を進める上での重要性が低い語の場合が多かった。今後の課題として、修正なしの漢字・漢字語の読みについて、教材を工夫することによりグループ練習の中で修正が可能なものと、学習者同士では修正が困難なものに分別し、後者については教師が導入・練習する際に注意して取り上げるよう、指導法および教材を改めていく必要がある。また、漢字・漢字語の読み以外に多く見られた、練習方法、自分の考えた解答の確認、および、漢字語の意味、意味的共起性にかかわる間違いへの対応は、教材で取り上げる内容を変更したり解答の提示方法を変更するなどして、既に教材の改訂を試みている。今後は、教材改訂後のデータを分析することによって、実際に効果が見られたかを検証したい。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、快く調査に協力してくださったグループ練習参加者の皆さんに深く感謝いたします。また、データの収集・整理に協力してくださった白崎友貴さん、永田泰代さん、谷内田千尋さん、山中江里子さんに心より御礼申し上げます。

なお、本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)「漢字教育におけるグループ学習—学習効果の検証と教材の開発—」平成24-26年度(課題番号24520574)による成果の一部です。

## 注

- 1) 日本の大学で学ぶ外国人留学生を対象とした授業で、交流協定校からの短期留学生、日本語・日本文化研修留学生、大学院生、研究生等が受講している。各期15週、週1回90分の授業が行われる。
- 2) グループ練習の録音は、事前に学習者に承諾を得た上で行った。ICレコーダーでの録音と同時にビデオカメラでの録画も行ったが、分析ではICレコーダーでの音声データを主に用い、必要に応じて録画データで確認した。音声データを文字化する際に、学習者の名前は別名で入力するなど個人が特定できないように配慮した。
- 3) 実際に授業で行ったグループ練習の回数はこれよりも多いが、録音が途中で切れてしまった回や録音状態が悪くなかった回、および、グループの他の学習者が授業を欠席したために学習者が授業補助者(日本語母語話者)とグループ練習を行った回は、分析の対象から外した。
- 4) うち3件は、「もうける(設ける)」を「もうかる」、「しんじる(信じる)」を「えんじる」と読むなど平仮名で表記された漢字語を読み間違えたものだった。
- 5) ここで取り上げる文法にかかわる間違いは、グループ練習の教材で提示された設問や例文、練習として行った例文作りの中で見られた間違いである。グループ練習の内容と直接かかわらない学習者の発話で見られた文法的な間違いは分析の対象から外した。
- 6) 濱田・高島(2014)と本稿で使用したデータは同じものだが、読みについての質問、間違いの総数は、本稿のほうが若干増えている。これは、本稿では注4で示した平仮名で表記された漢字語の読み間違いも含めたことと、再度データを確認する中で濱田・高島(2014)では見落としていたデータを追加したことによる。

## 参考文献

- (1) 濱田美和・高島智美(2013)「複式漢字クラスにおけるグループ練習の有効性」『2013年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, pp.377-378
- (2) 濱田美和・高島智美(2014)「漢字クラスにおけるグループ練習時の学習者同士のやりとりの分析—漢字の読み注目して—」『2014CAJLE Proceedings』, pp.21-26



## 日本の大学で学ぶ留学生の文化変容に関する一考察 —富山大学の場合—

バハウ サイモン ピーター

### 要 旨

Under the current global university trends along with the proposed policy for the intake of three hundred thousand (300,000) international students that the Japanese Government Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) is implementing, acculturation of international students after enrolment is essential. The need is therefore on the rise while the Japanese institutions struggle to tackle the task of acculturation of the international students who are basic beginners of the Japanese language so as to conform to society and lead an informed learning engagement in their respective fields of study. The subject students registered and studying in the Intensive Japanese Language Course while taking the Nihonjijo Class or Japanese Affairs and Culture Class (JACC) at the University of Toyama are no exception. The aim of the JACC is to equip the students with basic Japanese affairs and cultural knowledge necessary to lead a fruitful study and life environment. The mode of instruction is primarily Japanese. However, depending on the viability of language or languages in class, English is utilized as an alternative mode. Moreover, in order to enhance the international students' language comprehension and composition with direct input of Japanese affairs and culture, the class takes on Japanese students who act as tutors and volunteers together with other senior international students to participate in class so that assistance and support is offered to the concerned students in their expressions of subject matter. The paper aims to explore into the adaptation and acculturation of such international students in and out of class. The results of the research are hoped to contribute to current and future improvements in acculturation, adaptation and enhancement of necessary knowledge and skills for the international students during the period of their undertaking here in Japan. The subject location of University of Toyama is no exception since it is a national university corporation affiliated university that abides by the rules and principles set out by the Japanese Government

Keywords: Acculturation, adaptation, enhancement, international students, Japanese students, Japanese affairs, culture, language

## 1. Introduction

### 1.1 Objective of the research

The research is aimed at exploring into the current conduct of acculturation in classes where the Japanese language and culture need to be acquired by international students before they venture



into their specific or specialty education. The author has been in charge of the Japanese Affairs and Culture Class which is part of the Intensive Japanese (language) Course that is offered at the University of Toyama's Center for International Education and Research (CIER) for the past three semesters since spring 2013. The international students who are eligible to register in the course have to be MEXT, Japanese Education Ministry sponsored, recommended by their home country's embassy or internally from the university, whereby the student numbers are minimal. The objective of JACC is to impart to the international students necessary Japanese cultural knowledge or intelligence primarily for studies and livelihood at school and during the span of their stay in the country. However, most of the students have zero or little knowledge of the language. Therefore, there is a necessity to intensively learn and master the Japanese language within a given period, in this case, a semester, which is roughly half a year. On completion of the Intensive Japanese Course together with this Japanese Affairs and Culture Class, most students move on to the next level of language and culture studies, too. The research will be followed on when the international students start utilizing the knowledge and skills acquired in their specialty studies, too.

## 1.2 The Japanese Affairs and Culture Class

The Nihonjijo Class or Japanese Affairs and Culture Classes (JACC) so far have been comprised mostly of first time Japanese language learners. The students not only come originally from a variety of countries but possess a diverse cultural backgrounds together with their own languages. So far there have been students who were recommended because their knowledge and ability of the target language, Japanese, together with alternative languages like English was in question. In one class, a variation of French and Chinese were the original languages. Hence, even English was not a viable mode for communication. To overcome this situation, classmates with better English abilities were requested to assist in interpreting but from English to Chinese. In extreme cases where the student interpreter was absent from class, instruction in Japanese with a lot of written communication was the only means. The assistance provided by the Japanese tutor or volunteer in and outside of class was an invaluable experience for the students concerned.

Below is a list of the number of students and their source of recommendation for enrollment in the Intensive Japanese Course which is a prerequisite for the Japanese Affairs and Culture Class (JACC).

**Chart 1. Recommendations for entry in to the Intensive Language Course and numbers of students**

	Nationally Sponsored		Embassy Recommended		University Recommended		Internally Recommend		Japan- Korea Collaboration		Total	
	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	Males	Females
1st Semester/ April'13- Sept.'13							2	1				3
2nd Semester/ Oct.'13- March'14	2	1			1	2						6
3rd Semester/ April'14- Sept.'14			1				2					3

Key:

M: Male F: Female

The chart below is a description of the affiliations of the international students

**Chart 2. Recommendations for entry into the Intensive Japanese Course and numbers of students**

Faculty/ Graduate School / Semester	Economics	Human ities	Human Develop ment (Educ.)	Science	Engine ering	Pharmac eutical Science	Male	Female	Total
1 <sup>st</sup> Semester/ April'13- Sept.'13	1			1	1		2	1	3
2 <sup>nd</sup> Semester/ Oct.'13- March'14			4	1		1	3	3	6
3 <sup>rd</sup> Semester/ April'14- Sept.'14					3		3		3

## 2. Previous literature

There have been numerous previous remarkable research work compiled in this perspective of linguistic and cultural acculturation of international students in Japanese universities. However, most of these superb work have been very well written in the Japanese language by again mostly authors of Japanese original who instruct and see the need and have therefore investigated deeply into the contents with much theory and practicality. The author wishes to include these previous works together with a blend of current empirical approaches in tune with the global trends surrounding both the international students, especially those students originating from traditionally close cultural settings such as the East Asian ones with similar backgrounds to non-East Asians who lack the knowledge of kanji or Chinese characters in the language and culture attached to it. On the other hand, the mode of instruction in the class is Japanese. However, to supplement and strengthen comprehension, English is utilized where necessary. Moreover, the support extended by the assisting Japanese and senior international student tutors and volunteers in the class is much appreciated. This part of the class needs further documentation for enhancement of programs for international students.

## 3. Objective of the Japanese Affairs and Culture Class

The objective of the Japanese Affairs and Culture Class (JACC) is to acquaint and equip the international students with the Japanese affairs and culture. It also serves as an avenue where clarification of queries or impressions of Japan, its affairs, culture and language can be done. In addition, similarities and differences between each other can also be confirmed with so as to be prepared and equipped to lead a healthy research and life environment in their localities.

### 3.1 Language enhancement

The international students enrolled in the JACC are also enrolled with the Intensive Japanese and Introductory Japanese Courses offered by CIER. They are required to attend classes for four (4) periods from Monday to Friday. JACC plays the role of being a breather for the students since it does not have to be strictly Japanese. However, in support of their language studies, the students are in regular contact and checked on by their Japanese counterparts and seniors who participate in class so as to utilize and enhance on the Japanese language that they have acquired in the Intensive Japanese

course. This activity also assists in enlightening the Japanese students who are participating in the class to be more aware of rediscovering, communicating and conveying their own culture using their mother tongue.

The Class is conducted primarily in Japanese. However, as mentioned earlier, the mode of instruction changes from Japanese to English depending on language viability as show in the chart below.

**Chart 3. Instruction mode (Language) Proportion**

Mode of Instruction (1 <sup>st</sup> month)	Japanese × 30%	English ○ 70%
Mode of instruction (2 <sup>nd</sup> month onwards)	Japanese ○ 70%	English × 30%

Key:

○ Language Viability

× Non-viability

### 3.2 Support for enhancement in Class by Japanese students

In this case the assistance provided here would be categorized into advising for the international student in both study and life related matters. Since the international students are living away from their homes, family and otherwise an environment more accustomed, there is a need to listen to their thoughts and provide necessary advice and guidance where possible. As mentioned by Yokota (1999) that for the “international student who does not possess the basic human relationship or social network in Japan, exchange forms the platforms to conduct support.” In addition, Tsuboi (1999) also states that “with respect to support for the international students, the domestic or Japanese students on campus provide the closest existence of such support to be extended.” As such, although programs for tutors have been established by the national university corporations since 1972, due to budgetary constraints, not all international students, including the trainee students are allocated tutors. Thus, this leads us to publicizing and taking on language volunteers for the classes to supplement by supporting their international counterparts for mutual benefits.

### 3.3 Cross Cultural Understanding

Experiences of miscommunication in a language and culture different from one’s own can lead to misconceptions. Acquiring aspects of language alone of one culture is said to be insufficient. As such, cross cultural exchange and understanding among all parties concerned will lead to learning about each other’s values. If this can be said with the international students for understanding the behavioral patterns of the host, the very same can be also said for the Japanese counterparts with regard to their guests.

### 3.4 Understanding of One’ s Own Culture

In order to understand other cultures, one also has to have respect for their own cultures and languages. From one’s own culture alone can one be able to make judgments of the other. As such the confirmation and then comparison of one’s own culture to that of the other becomes a key to leading a fruitful campus life.

### 3.5 Avenue for Intercultural Exchange

The Japanese Affairs and Culture Class plays the role as an avenue for further exchange

activities among both the domestic Japanese students and the international students. Most Japanese students who participate in the JACC class are either tutors for the students or language and exchange volunteers who would positively like to mingle with the international students. From the class, the friendship and relationship built is carried out the community lounge of the CIER where international exchange activities such as cooking together and going for other recreational activities on and off-campus are planned and implemented. Japanese students have formed an international exchange circle which actively supports and collaborates with the international students in their conquest for adaptation to the environment and acculturation both on and off campus.

### **3.6 The Japanese Affairs and Culture Class (JACC)**

While most classes including the students' Japanese language classes which are instructed in a teacher oriented manner, the JACC is led in a more natural style with regard to speed and vocabulary used. Since the aim of the class is to enhance not only linguistic but cultural skills, the focus is more towards the students understanding and comprehension of the contents offered together with the readiness to be expressive about the contents. It has been observed that neither Japanese nor English can be the modes of instructions because the students are mostly beginners and still studying to acquire the Japanese language. As such, the instruction mode varies from batch to batch.

Assistance is required where the Japanese and senior student language and class volunteers play a vital role. These volunteers extend support when the international students find it difficult to form words and express their thoughts in the Japanese language. The instructor has to display a certain amount of patience and understanding in this regard. As a result, only half the contents of the class can be conveyed in the beginning. Therefore, the instructor provides materials that are easily accessible and useful for the students' language acquisition and cultural adaptation.

### **3.7 JACC Class Procedures**

The Class is conducted by firstly giving contents of the lesson prior to class with some options for students to air their views and queries about the contents. Because the contents may change, a notification of the contents for the next lesson is usually informed in the previous class so that students can prepare and search vocabulary and contents necessary for the class and discussion. The Class is held in a seminar style where students are seated so that they are all able to see each other's faces and respond to questions quite frankly.

The teacher leads the class as a facilitator or moderator, but clarifies that there can always be interruptions for to explanations or elaborations on the contents in discussion. A mini-lecture on the contents is usually given for the first half of the Class. Then questions are answered where in most cases, discussions are held on the related contents and materials. In the discussions, the teacher facilitates or moderates in a way so that all students have a fair say and participation. In addition to this, where time permits, the students are asked to share about their own cultures in comparison to those on Japan. The students practically enjoy the share session because they then all get a fair understanding only after comparisons are made. This phenomenon changes to more questions and queries and other doubtful matters as time passes by because the students' Japanese language abilities become better.

### **3.8 Class Evaluations and Comments**

Evaluation and comments received from the students with regard to the following two questions are as follows. Question 1 reads: What opinion do you have of studying together with domestic or Japanese students? The responses were positive as such that the class was very enjoyable. The Japanese students became friends with them and were very kind. They taught them about their Japanese language and culture. The students further mentioned that the JACC class was useful for acquiring a great deal about the Japanese culture and lifestyle and its rules which are necessary for acculturation in their campus lives. Question 2 reads: Is it necessary for you to learn the customs, habits and ways of thinking of the Japanese people to live in Japan? The students replied by saying "Yes." They all said that they needed to adapt as quickly as they can to the Japanese environment and lifestyle. Therefore, they needed to be well informed in a short time span about the various contents and aspects of life in Japan.

#### **4. Issues and Future undertakings**

The issues that need addressing are such that the number of students from non-Asian or kanji Chinese character comprehending destinations is not expected to increase any more due to the current regional political issues pending. It is anticipated that more non-Asians will be coming to study in Japan. Hence, the need arises for support to be extended by way of English or a more accessible support system such as the tutor or volunteers in and outside of class. On another note, the Japanese students who assist these international students may also be interested in studying abroad. Therefore, the opportunity given to them while on home campus boost their confidence in speaking with non-Japanese students and experiencing a culture or system that is not Japanese

While this may only pose as a preliminary approach, there needs to be further research and collation of data done as a follow-up on the international students after the completion of the Intensive Language Course and entry into their major and specialty research. Concretely speaking, a survey on the utilization of the language skills acquired in the Intensive Language Course together with the Affairs and Culture Class to verify their adaptability and acculturation is a prerequisite. Only upon follow ups can one also obtain enough ground evidence to proceed on to design and coordinate a class with good assistance for effective acculturation of affairs and culture to the students concerned.

#### **5. Conclusion**

To sum up, the author wishes to utilize this study to assist in the acculturation of the international students by offering a planned and coordinated support system with the Japanese Affairs and Culture Class through the assistance of the Japanese students so that while learning together, friendship and collaboration is established with mutual understanding that will hopefully accelerate adaptation. Language acquisition is always a question. However, to the international student, the problem lies in its utilization or implementation. Therefore, follow-up survey to account for whether the acquired skills are properly executed becomes an important factor in this research.

On another note, the author also wishes to invite Japanese students who wish to study abroad to actively participate in the Class. When the Japanese students participate in the Class, they are also exposed to the queries that their international counterparts embrace. The support they extend in their mother tongue will be an eye-opener for them to prepare for their own studies abroad where initial communication will be centered around self-introductions and about homeland features. In this way, a viable system can be established which is a mutual one or win-win basis. However, this still remains to be identified and confirmed.

## References

1. 出原節子 2002. 「異文化トレーニングとしての『日本事情』教育」『富山大学留学生センター紀要』創刊号 pp. 20-29
2. ——2006. Living in a Different Culture as a Student. The Japan Association of Comparative Culture. Vol.74
3. ——2011. Regarding the Plan to Accept International Students. 『富山大学留学生センター紀要』 Journal of International Student Center, Toyama University. Vol.10
4. 中川かずこ 2007. 「異文化接触による相互の意識変容に関する研究」北海学園大学学園論集 134, 1-17
5. ——2012. 「日本人学生と留学生の異文化交流－異文化接触，協働的活動を通じた大学教育への適応と意識変容－」留学交流 2012年4月号 Vol. 13
6. 鈴木勘一郎SUZUKI, Kanichiro and 平井達也HIRAI, Tatsuya. 2013. 「多文化における大学教育とキャリア開発に関する比較研究－日本人並びにアジア人卒業生を対象にして」A Comparative Study of Multicultural Education and Career Development in a University Setting: Japanese and Asia Alumni's Questionnaire Results, Multicultural Relations, Vol.10 pp.87-101



# II 年報

2013年4月  
▼  
2014年3月



# 1. 指導及び受入・派遣支援報告（2013年4月～2014年3月）

バハウ・サイモン・ピーター  
副島 健治

## 1 はじめに

2013年10月1日より、富山大学留学生センターは発展的に解消し、「国際交流センター」と名称を変え、受け入れた外国人留学生に対して日本語教育などの指導をするというだけでなく、富山大学の学生を海外に送り出すという機能と役割を付加した意味合いを持つように位置付けられた。2013年4月～9月においては留学生センターの業務として、同年10月～3月においては国際交流センターの業務として、以下のような活動を行った。

1. 外国人留学生に対する修学・研究上、生活上及び異文化適応上の指導・助言
  2. 富山大学の学生の海外留学にかかる支援
  3. 異文化間理解教育にかかる活動
  4. 外国人留学生と日本人学生の交流推進にかかる活動
  5. 地域社会との協力、連携にかかる活動
  6. 外国人留学生の日本での留学生活に関わる各種情報の提供、地域交流団体等が主催する行事の案内
- 留学生センター(2013年4月～9月)と国際交流センター(同年10月～3月)では、その業務の位置づけが異なる部分もあるが、小稿では両者を合わせて2013年度に行った主な業務活動として報告する。

## 2 外国人留学生に対する修学・研究上、生活上及び異文化適応上の指導・助言および、富山大学の学生の海外留学にかかわる支援

コンサルテーションアワーを毎週水曜日に設定し、富山大学で学ぶ外国人留学生、海外留学を目指す学生への指導・助言を行った。また、水曜日以外においても、学生の事情を考慮し相談を受け付けた。

相談内容によって、必要があれば、各学部、留学支援チームや「学生なんでも相談窓口」等と連携して対処した。

件数：(105) 件

うち外国人留学生に対する指導・助言(41) 件、日本人学生に対する指導・助言(60) 件

その他(富山大学教職員、卒業生、地域住民等からの相談)(4) 件

海外留学相談については、センター内に「留学情報資料室」を設置して海外留学を希望する学生に情報の提供を行うとともに、海外への留学を希望する学生の留学の相談にのっている。

主な希望留学先は、カナダ、アメリカ、イギリス、オーストラリア等の英語圏諸国、台湾、中国、韓国、タイなどであった。相談者の内訳は以下の通りである。

面談回数：200回

相談者数：105人

(内訳) 人文学部(29人)、人間発達科学部(23人)、経済学部(36人)、理学部(6人)、工学部(5人)、芸術文化学部(1人)、医学部(1人)、大学院(工)(4人)

### 3 異文化間理解教育にかかる活動および外国人留学生と日本人学生の交流推進にかかる活動

#### (1) 「日本事情」教育

日本語研修コース「日本事情」の授業に、日本人学生も参加してもらい、留学生との合同授業を行った。この授業は、教師を含む授業参加者相互の対話型（イナターアクティブ）の形態をとり、留学生自身のまなざしを通して、日本と日本以外の国の文化との異なる点および類似性の両方を認識するとともに、留学生がその違いを理解し、日本（富山）で学修や生活に活かしていけるようにすることが目的である。また、お授業の経験の中で日本人学生のサポートもあって、留学生の日本語学習自体も促進されてくという副産物も期待される。

#### (2) スタディ・エクスカージョン

前期と後期に各1回、日本文化への理解を深めるとともに、外国人留学生と日本人学生との交流を目的として、スタディ・エクスカージョンを実施している。

##### ・前期のスタディ・エクスカージョン

<実施日・見学場所>

2013年6月28日（金）

五百羅漢・富山市民俗民芸村

<参加者数>

外国人留学生 8人

日本人学生 2人

センター教員 3人 合計：13人

##### ・後期のスタディ・エクスカージョン

<実施日・見学場所>

2013年11月22日（金）

五百羅漢・富山市民俗民芸村

<参加者数>

外国人留学生 15人

日本人学生 2人

センター教員およびスタッフ 4人 合計：21人



(2013年6月28日(金) 民俗民芸村にて)

スタディ・エクスカージョン実施後に取ったアンケートによれば、参加した学生たちの満足感が高く、この企画が大変好ましく受け止められていることが分かった。

#### (3) ホームビジットとホームステイ

センターの日本語研修コースで学ぶ留学生を対象として、日本の家庭に滞在し異文化体験をさせるために、ホームビジットまたはホームステイを実施している。ホームビジットは富山市民国際交流協会（以下、「T C A」とする。）の協力と斡旋、ホームステイは公益財団法人とやま国際センター（以下、「T I C」とする。）の協力と斡旋により実現している。ホームビジットまたはホームステイのいずれかを体験するかは日本語研修コースに所属する留学生の希望に基づいている。

2013年度は、前期にホームビジット、後期にホームステイを実施した。

実施日・参加者数

前期のホームビジット：2013年8月3日（土） 3人（28期生）

後期のホームステイ：2013年1月26日（土）～27日（日） 6人（29期生）

プログラム終了後、学生は活動報告書をT C AとT I Cに提出した。

#### (4) 外国人留学生と日本人学生の交流のためのパーティー

センターの談話室は外国人留学生と日本人学生が昼食を食べながら語り合うなど、日常的な交流の場となっている。加えて、外国人留学生と日本人学生の交流を目的とした下記のような企画を開催した。

ハロウィンパーティー

<日時・参加者数>

2013年10月30日(水) 17:00～ 35人

## 4 地域における異文化理解教育等への協力

### (1) 地域における各種行事への協力

県内の教育機関で行われている異文化理解教育や自治体や公的機関等が主催する国際交流行事、地域の各種団体等が主催するその他の行事等において、その要請に基づき、講演や参加依頼・協力依頼があった場合は、教員あるいは留学生が協力をしている。

平成25年度センター教員が参加・協力した主な国際交流行事

国際交流行事	期日	主催団体	内容
市民講座	H25年10月8日	TCA	講演（英語）
富山インターナショナルフェスティバル	H25年11月10日	TCA・TCI	ブース出展
国際コースセミナー	H25年12月21日	富山県立富山南高等学校	ワークショップ講師
富山インターナショナルエクスチェンジ新年交歓会	H26年1月19日	TCA・TCI	参加
平成25年国際交流TCAカレッジ	H26年2月6日	TCA（総務企画委員会）	講演
「国際青年育成交流」帰国報告会&料理交流会	H26年2月23日	TCA	参加

また、学生の参加協力した国際交流団体および行事内容については「平成25年度外国人留学生と地域との交流状況」（本誌p.62）を参照されたい。

### (2) 自治体等との連携

2013年度は、TCAおよびTIC（前出）を訪ね、ホームビジット、ホームステイに関する実施要項の見直しをはじめとして、今後のさらなる協力関係構築のための打ち合わせを行った。

## 5 各種情報の提供

全学の留学生を対象に、留学生活に関わる情報を提供し、地域の交流団体等が主催する行事等の案内をセンターの談話室に掲示している。

## 6 オリエンテーション

### (1) 学部新入留学生のためのオリエンテーション

学部教職員や学生支援グループ等の協力により、全学のオリエンテーションとは別に、学部新入留学生を対象としたオリエンテーションを実施している。また、2013年度からは希望すれば大学院生も参加できることとした。後期のオリエンテーションには新規来日の大学院生も参加できるようにした。

<実施日時・場所>

2013年4月2日(火) 9:30~13:45 黒田講堂会議室

<参加者>

新入留学生 25人(うち大学院生3人)

教職員(留学生センター教員, 学部教職員, 学務部職員(留学支援チーム・学生支援チーム))

<オリエンテーションの内容>

- ・ガイダンス
  - 1 授業料, 授業料免除, 奨学金等についての説明
  - 2 留学生センターからの注意事項(危機管理等)
  - 3 学部教職員からの注意事項(大学生活の心得, 除籍・懲戒・退学・休学, チューター制度, アルバイト等)
  - 4 キャンパスツアー
- ・懇親会(昼食)

**(2) 新規来日非正規生(研究生, 科目等履修生, 特別聴講学生)のためのオリエンテーション**

学部留学生(正規生)のオリエンテーションとは別に, 研究生, 科目等履修生, 特別聴講学生を対象としたオリエンテーションを実施した。

<実施日・場所・参加者数>

2013年4月10日(水) 留学生センター2階カウンセリング室 3人

2013年10月9日(水) 共通教育棟4階A43教室 28人

<オリエンテーションの内容>

- ・学内・学外における諸手続きについて
- ・学生生活について
- ・留意事項・危機管理について

**(3) 学部新入生のための時間割作成オリエンテーション**

入学間もない学部新入留学生のために, 時間割作成の支援として, 学部ごとの先輩の留学生が各新入留学生に履修の仕方を個別にアドバイスするという形式でオリエンテーションを実施した。

<実施日・場所・参加者数>

2013年4月5日(金) 17:40~19:00 共通教育棟1階C11教室 20人(協力した先輩留学生8人)

## 7 その他

富山大学の国際交流の学生団体(名称「partners」)の設立の準備に当たっての支援とアドバイスを行った。

## 8 おわりに

富山大学には346人(2013年5月1日現在)の外国人留学生が在籍しており, 留学生たちがより良い環境の中で安心して留学生活を送ることができるように, 自治体をはじめとする諸団体, あるいは地域の方々の暖かい協力と支援を頂いている。この誌面をかりて感謝の意を表したい。

また, 冒頭に述べたが, 富山大学留学生センターが発展的に解消し, 年度の途中ではあったが, 2013年10月1日より「国際交流センター」と名称を変え, 外国人留学生に対して日本語教育などの指導をするというだけでなく, 富山大学の学生を海外に送り出すという機能と役割を付加した意味合いを持つように位置付けられた。センターの教員, スタッフに課せられた責任は重いものと受け止めなければならないであろう。その上で, センターの教員とスタッフの全員の共通理解をはかり一致協力して,

富山大学の各部局および自治体をはじめとする地域との連携をとりながら、今後の一層の努力が求められると思われる。

## 2. 日本語教育プログラム報告（2013年4月～2014年3月）

田中信之  
濱田美和  
副島健治

国際交流センターでは、富山大学に在籍する外国人留学生のための日本語プログラムとして、日本語研修コース、日本語課外補講、総合日本語コース、日韓共同理工系学部留学生プログラム、この4つを提供している。2013年度は、前期、後期ともに、日本語研修コース、日本語課外補講、総合日本語コースを開講した。日韓共同理工系学部留学生プログラムについては、2013年度は学生の配置がなかったため、開講しなかった。

2013年度は、前期に42人、後期に56人の外国人留学生及び外国人研究者がセンターの日本語プログラムを受講した。各日本語プログラムでは、従来と同様に、専任教員がコーディネーターを務め、毎日の授業内容と学生の出欠状況を記録・閲覧できる「授業記録システム」を活用して、受講者の学習の進捗状況を把握し、日々の授業に取り組むことができた。また、2013年度前期より、これまで日本語研修コース専用の科目としていた中級クラス「文法C」と「漢字」の2つの授業科目について、日本語課外補講の学生も受講できるように改めた。この他に、留学生の日本語学習を支援するためのサイト「日本語学習支援サイトRAICHO」の運営を行い、富山大学で学ぶ留学生の日本語学習を授業以外の面からも支援した。

以下、日本語研修コース、日本語課外補講、総合日本語コース、日韓共同理工系学部留学生プログラム、日本語学習支援サイトRAICHOの順に、2013年度の活動状況について報告する。



# 日本語研修コース報告（2013年4月～2014年3月）

田中信之

## 1 はじめに

大学院入学前予備教育日本語研修コースは、主として、文部科学省によって配置される大使館推薦国費研究留学生および教員研修留学生を対象とした日本語集中コースで、毎年4月と10月に開講し、各期15週間75日のコースを提供している。1999年10月に富山大学国際交流センターの前身である留学生センターが開設され、第1期日本語研修コースが開講した。2013年10月に留学生センターが改組、国際交流センターが設置され、2014年3月には第29期生を送り出した。富山大学に配置される国費研究留学生・教員研修留学生の数は少なく、受講定員に余裕があるため、2000年10月開講の第3期日本語研修コースからは、学内公募を実施して、大学推薦国費研究留学生や私費研究生等も受け入れている。本稿では、2013年4月から開講した第28期と同年10月から開講した第29期について報告する。

## 2 受講者

第28期は、文部科学省によって配置された予備教育生はゼロであったので、学内公募を実施し、私費留学生3人が受講・修了した。第29期は、文部科学省によって配置された国費教員研修留学生3人、学内公募による大学推薦国費研究留学生3人が受講・修了した。受講・修了者は表1の通りである。

表1 日本語研修コース受講・修了者（第28期・第29期）

期	名前	国籍	指導教員
28	ブリス チャッカム カムチュン	カメルーン	富山大学 上田 晃 教授
	姜 陶 (キョウ トウ)	中国	富山大学 唐 政 教授
	朱 容 博 (シュ ヨウハク)	中国	富山大学 森口 毅彦 教授
29	ダビラ ウエルト アルド アルトゥロ	ペルー	富山大学 長谷川春生 准教授
	サウ カンムリー	カンボジア	富山大学 岡崎 浩幸 教授
	ソフィア パストル マタモロス	スペイン	富山大学 隅 敦 教授
	ディア アニンタ クスティアリニ	インドネシア	富山大学 藤 秀人 教授
	アギラル ラミレス ハエル エルシリア	ホンジュラス	富山大学 若山 育代 准教授
	イスラム サイフル	バングラデシュ	富山大学 倉光 英樹 教授

(指導教員の職名は2014年10月現在)

## 3 コース担当者

センター専任教員5人（加藤扶久美，副島健治，田中信之，バハウ サイモン ピーター，濱田美和）と、非常勤講師8人（飯野玲子（第28期のみ），加藤敬子，高島智美，中河和子，永山香織，藤田佐和子，松岡裕見子，横堀慶子）が授業を担当し、田中信之がコースのコーディネートをを行った。

## 4 コーススケジュール

第28期は、2013年4月8日（月）に開講式，同年9月27日（金）に修了式を，第29期は、2013年10月8日（火）に開講式，2014年3月3日（水）に修了式を行い，どちらの期も15週間75日の集中授業を行った。各期の主なスケジュールは以下の通りである。

<第28期>

2013年 4月4日(木)	学内公募選考
4月5日(金)	コースオリエンテーション, 挨拶の練習, ひらがな
4月8日(月)	開講式, 授業開始
6月14日(金)	「私の国」発表会
6月28日(金)	スタディー・エクスカージョン(富山市民俗民芸村)
7月26日(金)	授業終了
7月29日(月)~8月1日(火)	スピーチ練習, 文集作成
8月4日(土)	ホームビジット
8月5日(月)	スピーチ発表会(「私の専門」発表会)
9月27日(金)	修了式

<第29期>

2013年 10月4日(金)	学内公募選考
10月7日(月)	コースオリエンテーション, 挨拶の練習, ひらがな
10月8日(火)	開講式
10月9日(水)	授業開始
11月22日(金)	スタディー・エクスカージョン(富山市民俗民芸村)
12月14日(土)~15日(日)	ホームステイ
12月20日(金)	「私の国」発表会
12月23日(月)~2014年1月5日(日)	冬季休業
2014年 2月10日(月)	授業終了
2月12日(水)~17日(月)	スピーチ練習, 文集作成
2月19日(水)	スピーチ発表会(「私の専門」発表会)
3月3日(水)	修了式

## 5 コース内容

授業は月曜日から金曜日まで1日4コマで,日本語と日本事情,コンピュータを中心とした内容で行った。初級クラスの「文法」10コマ中8コマと「語彙・表現」「聴解」「文字・漢字」「会話」各1コマの合計12コマ,および,中級クラスの「文法」10コマと「漢字」「聴解」「会話」各1コマの合計13コマは日本語課外補講の授業と合同で開講される授業である。通常の授業の他に,学生の個人の習熟度やニーズに合わせた指導を行うために,特別指導も行った。コース後半からは,専門課程への橋渡しの教育として,自分の専門についての口頭発表とレポート作成を行う「私の専門」プロジェクトも課した。

第28期,第29期ともに初級クラスのみが開講となった。第29期では,中級クラスの希望者がいたが,相談の結果,日本語課外補講の中級クラスを受講することとなった。表2,3にそれぞれの時間割を示す。



## 5.1 時間割

表2 第28期日本語研修コース時間割

	1 (8:45~10:15)		2 (10:30~12:00)		3 (13:00~14:30)		4 (14:45~16:15)	
	初級	中級	初級	中級	初級	中級	初級	中級
月	文法 (加藤敬)	文法A (高島)	文法 (加藤敬)	文法A (高島)	聴解 (加藤扶)	漢字 (濱田)	特別指導 (加藤扶・田中)	特別指導 (濱田)
火	文法 (田中)	文法C (濱田)	文法 (田中)	文法C (濱田)	語彙・表現 (藤田)	コンピュータ (濱田)	コンピュータ (田中)	読解 (加藤扶)
水	文法 (高島)	文法A (中河)	文法 (高島)	文法A (中河)	文字・漢字 (加藤扶)	会話 (横堀)	日本事情 (バハウ)	
木	文法 (横堀)	文法B (副島)	文法 (横堀)	文法B (副島)	コンピュータ (濱田)	聴解 (横堀)	読解・作文 (要門)	コンピュータ (田中)
金	文法 (永山)	文法B (松岡)	文法 (永山)	文法B (松岡)	会話 (飯野)	作文 (田中)	特別指導 (濱田・田中)	特別指導 (加藤扶)

※網かけのクラスは日本語研修コース専用クラス、それ以外は日本語課外補講との合同クラスである。

表3 第29期日本語研修コース時間割

	1 (8:45~10:15)		2 (10:30~12:00)		3 (13:00~14:30)		4 (14:45~16:15)	
	初級	中級	初級	中級	初級	中級	初級	中級
月	文法 (加藤敬)	文法A (高島)	文法 (加藤敬)	文法A (高島)	聴解 (加藤扶)	漢字 (濱田)	特別指導 (加藤扶・田中)	特別指導 (濱田)
火	文法 (田中)	文法C (加藤扶)	文法 (田中)	文法C (加藤扶)	語彙・表現 (藤田)	コンピュータ (濱田)	コンピュータ (田中)	読解 (加藤扶)
水	文法 (高島)	文法A (中河)	文法 (高島)	文法A (中河)	文字・漢字 (加藤扶)	会話 (横堀)	日本事情 (バハウ)	
木	文法 (横堀)	文法B (副島)	文法 (横堀)	文法B (副島)	コンピュータ (濱田)	聴解 (横堀)	読解・作文 (要門)	コンピュータ (田中)
金	文法 (永山)	文法B (松岡)	文法 (永山)	文法B (松岡)	会話 (松岡)	作文 (田中)	特別指導 (濱田・田中)	特別指導 (加藤扶)

※網かけのクラスは日本語研修コース専用クラス、それ以外は日本語課外補講との合同クラスである。

## 5.2 日本語科目

基本的な日本語文法を習得し、運用できるようになること、文字についてもひらがなやカタカナ、基本的な漢字を習得することを目的として授業を行った。

また、独自開発教材を用いて、正しい日本語の発音を身に付けるための指導も行った。

[使用テキスト] (主なもののみ)

- 文 法 『みんなの日本語初級Ⅰ,Ⅱ』(スリーエーネットワーク)  
『みんなの日本語初級Ⅰ,Ⅱ 書いて覚える文型練習帳』(スリーエーネットワーク)  
『毎日の発音練習』(独自開発テキスト)
- 聴 解 『みんなの日本語初級Ⅰ,Ⅱ 聴解タスク25』(スリーエーネットワーク)  
『わくわく文法リスニング99』(凡人社)  
『絵とタスクで学ぶにほんご』(凡人社)  
『にほんごきいてはなして』(ジャパントイムズ)  
『楽しく聞こう』(凡人社)

- 語彙・表現 『みんなの日本語初級Ⅰ，Ⅱ』（スリーエーネットワーク）
- 読解・作文 『みんなの日本語初級Ⅰ，Ⅱ 初級で読めるトピック25』（スリーエーネットワーク）  
『みんなの日本語初級 やさしい作文』（スリーエーネットワーク）  
『楽しく読もう』（凡人社）  
『わたしのにほんご』（くろしお出版）
- 文字・漢字 『ストーリーで覚える漢字300』（くろしお出版）
- 会 話 『クラス活動集101』『クラス活動集131』（スリーエーネットワーク）  
『みんなの日本語初級Ⅰ書いて覚える文型練習帳』（スリーエーネットワーク）  
『みんなの日本語初級Ⅱ書いて覚える文型練習帳』（スリーエーネットワーク）  
『絵で導入・絵で練習』（凡人社）  
『にほんごきいてはなして』（ジャパントイムズ）

### 5.3 日本事情

学内から国際交流学生ボランティアとして募集した日本人学生との交流・活動を通して、日本社会について学び、さらには習得した日本語を実際に使う機会を提供する。

また、留学生と日本人学生が共に自国の言語や文化に対する関心を高め、異文化を理解し、異文化コミュニケーション能力を養うことを目指す。

### 5.4 コンピュータ

この授業では、留学生が日本語環境でコンピュータの基本的な操作をすることができ、ひらがなやカタカナ、さらに漢字なども使って、正しい日本語の入力ができるようになることを目指す。また、あわせて、大学での勉学に必要な基本的な情報リテラシーの習得も目指している。

日本語のコンピュータ用語には漢字語やカタカナ語が多いため難解であったり、入力においても促音や拗音といった特殊音の入力が難しいなど、外国人が日本語環境のコンピュータを用いる際に特有な問題があるが、この授業ではそれを克服できるように指導することが大きな目的である。また、専門課程での勉学に備えて、ワープロソフトやプレゼンテーションソフトなどを使えるようになることも目指し、同時に日本語での電子メールの書き方、インターネットの使い方、およびそれに付随する著作権やセキュリティ対策などについても指導を行った。

[参考テキスト] 『日本語でできる！外国人のためのパソコンのきほん』（スリーエーネットワーク）

### 5.5 口頭発表プロジェクト

#### 5.5.1 口頭発表プロジェクト

日本語研修コースに在籍する留学生は、そのほとんどが大学院へ進学する予定の学生であり、コースが始まって半年後にはそれぞれの専門課程に進んで専門の勉強や研究を始めなければならない。教員研修留学生についても、このコースが終わると、教育に関するさまざまな授業を日本語で受けなければならないし、授業見学を通じて現場の教員とのやりとりが必要となる場面も多い。本コースでは、留学生が日本の大学院での研究活動を効率的に進められるように、スピーチ発表会で自分の専門の内容を簡単に説明する口頭発表を行い、さらにレポートにまとめるというプロジェクトを学生に課している。学生それぞれの留学目的に合わせて、大学院進学予定の学生はこれまで自国で研究してきた内容と富山大学で研究したい内容について、教員研修留学生は自国の教育制度の説明と富山大学で学びたい内容について、それぞれ原稿とスライドを作成してスピーチ発表会で発表し、レポートにまとめるというプロジェクトである。この活動は、一般日本語、コンピュータ、そして専門の学習が一体となって行われるものである。

具体的には、留学生は自分の専門について、専門用語を調べたり、必要な情報をインターネットなどから得たり、あるいは必要に応じて所属研究室の指導教員や学生に質問したりした上で、作文の時間に発表原稿を作成し、コンピュータの時間にプレゼンテーションソフトを使用してスライドを準備した。その後練習を重ね、最終的には、コース修了前に開催されるスピーチ発表会で、作成したスライドを示しながらプレゼンテーションを行った(5.5.2参照)。さらに、学生は発表原稿をもとにしてレポートを作成した。学生の作成したレポートは、第28期、第29期のものをまとめ、日本語研修コース修了レポート集『らいちょう』として発行した(5.5.3参照)。

### 5.5.2 スピーチ発表会

スピーチ発表会は、第28期は2013年8月5日(月)に、第29期は2014年2月19日(水)に、それぞれ午後1時半より開催した。第28期は15人、第29期は36人の出席者があった。出席者は富山大学の留学生および日本人学生、学生の指導教員やセンターに関係のある教員、学生のホストファミリー、学務部学生支援グループ留学支援チーム職員などである。特に、第29期のスピーチ発表会は学生の友人(日本人学生)やホストファミリーの方が多数来てくださり、例年以上の盛会となった。

留学生は、発表会に向けて、指導教員、同じ研究室の先輩留学生、日本人学生に協力してもらいながら熱心に準備を進めた。発表会に向けた準備は、読解・作文とコンピュータの授業の中で行ったほか、3人の日本語教員がそれぞれ分担した学生に対して、授業時間以外にも原稿チェック、発表練習などの指導を行った。

### 5.5.3 修了レポート集作成

スピーチ発表会で口頭発表を行った原稿をもとにレポートを作成し、修了レポート集『らいちょう』として発行した。留学生は各自の専門についてのレポートを作成したほか、それぞれの期の中表紙、寄せ書き、写真のページなどを共同で作成した。各自の能力を発揮し、話し合いを進めながら、コンピュータの授業で学んださまざまな文書の作り方などを能率良く活かし、完成度の高い文集を作り上げた。

## 6 成績評価

メインテキスト(『みんなの日本語』)に基づく定期試験を7回実施した。この定期試験は、筆記試験(文法、作文、読解)、聴解試験、会話試験から構成されるものである。また、「語彙・表現」「文字・漢字」のクラスでは期末試験を実施した。口頭発表プロジェクトについても、原稿と発表会当日の発表を教員が採点し、プロジェクトの成績を出した。コース修了時に、定期試験、その他の試験、口頭発表プロジェクトの成績を総合して、コース全体の成績判定を行い、コースへの出席率も含めた成績表を作成して、受講者本人と指導教員へ通知した。

## 7 コース評価

日本語研修コースでは、コース改善に役立てるため、学期終了時にアンケート調査を実施している。実施前に、成績等には全く影響しないことを伝えた上で、アンケート調査票に記入してもらった。第28期では、コース全体、日本語の授業の内容、テスト、コンピュータ授業、口頭発表プロジェクト、見学、ホームステイ・ホームビジット、日本事情の7項目、第29期では、さらに、宿題、特別指導の2項目を加え、調査を行った。回答方法は、5段階で評点をつけるものと、与えられた選択肢から該当する答えを選択するものがある。また、自由意見は日本語または英語で記入させた。

第28期のコース評価は、従来どおり、口頭発表プロジェクト終了後に実施したが、時間的に慌ただしいため、自由記述が少なかった。そこで、第29期では、日本語の授業の最終日に、口頭発表プロジェクトを除く、すべての項目の評価を実施することにした。

それぞれの期の結果を表4、表5に示す。自由意見については、英語で書かれたものは日本語に翻訳して、日本語の誤りがあるものは訂正して掲載する。翻訳・訂正ともにコーディネーターの判断によって行っている。

表4 第28期コース評価

<p>質問及び回答結果 (5段階評価の場合は点が高いほど よい評価であることを示す)</p>	<p>自由意見</p>
<p><b>(コース全体)</b>  コースは役に立ったか： 5.0  スケジュールはどうだったか：  忙しすぎる1人,忙しい1人,ちょうどいい1人  日本語は上達したか：  上達した3人</p>	
<p><b>(日本語の授業)</b>  授業はどうだったか： 5.0  教科書はどうだったか： 5.0  ハンドアウトはどうだったか： 5.0  教師の教え方はどうだったか： 5.0</p>	
<p><b>(テスト)</b>  テストはどうだったか： 5.0  テストは多かったか：  多すぎる1人, 多い1人, ちょうどいい1人</p>	
<p><b>(コンピュータ授業)</b>  授業は役に立ったか： 4.7  テキストはどうだったか： 5.0  教え方はどうだったか： 5.0</p>	
<p><b>(口頭発表プロジェクト)</b>  プロジェクトはたいへんだったか：  ふつう2人, 未記入1人  プロジェクトは役に立ったか： 5.0  発表会は役に立ったか： 5.0</p>	
<p><b>(見学) 1人欠席</b>  見学は楽しかったか：  はい2人  見学場所は適当だったか：  はい2人  見学の時期は適当だったか：  はい2人</p>	<p>どんなところが楽しかったか： (記述なし)</p>
<p><b>(ホームステイ・ホームビジット)</b>  ホームステイ・ホームビジットは楽しかったか：  はい3人  時期は適当だったか：  はい3人</p>	<p>おこのみやき,いっしょにつくって,とてもおいしかったです。</p>

<p><b>(日本事情)</b> 日本人と一緒に勉強するのはどうだったか：</p> <p>日本の文化を知らなければならぬと思うか： 思う3人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• たのしかったです。日本人の友達がやさしかったです。日本語を教えてくださいました。</li> <li>• 日本の文化や生活になれるため、重要なルールを知る必要があるが、それに役立った。</li> <li>• はやく日本の生活になれるので、いろいろなことを知らなければならぬ。</li> <li>• 知らないとき、日本で生活は大変です。</li> <li>• 一番重要なのは日本社会への適応です。日本文化を知ることによって、日本人との生活がうまくいきます。</li> </ul>
--	--

表5 第29期コース評価

<p>質問及び回答結果 (5段階評価の場合は点が高いほどよい評価であることを示す)</p>	<p>自由意見</p>
<p><b>(コース全体)</b> コースは役に立ったか：4.8 スケジュールはどうだったか： 忙しすぎる3人，忙しい1人，未記入1人 日本語は上達したか： した2人，少しした3人，未記入1人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• このコースはとてもおもしろくて、とても楽しかった。先生方はとてもすばらしかった。先生方はとても親切で、教授法もとても興味深かった。感謝いたします。</li> <li>• このコースはとてもよくて、役に立った。しかし、とても進度が速いと思う。すでに学習したことも時々忘れてしまうためだ。特に、漢字は300字のうち、189字しか勉強できなかった。</li> <li>• とても難しかったが、たくさんのことを学んだ。とてもハードなコースだったが、とてもよかった。</li> <li>• このコースは本当に良かった。ただ、コース進度が少し速すぎる部分があった。最終テストはとても難しかった。私たちはある部分は学習できなかった。</li> <li>• 良かった。しかし、スタートはゆっくりしたほうがよい。私たちは日本語について多くのことを知らないからだ。スタートが大変なのが問題だ。</li> <li>• このコースは私たちにとって重要だ。このコースは入門のクラスだが、日本語が何か知る前にコースが始まってしまい、むずかしかった。</li> </ul>
<p><b>(日本語の授業)</b> 授業はどうだったか： 4.3 教科書はどうだったか 『みんなの日本語』： 4.8 『毎日の発音練習』： 4.8 『ストーリーで覚える漢字300』： 4.8 ハンドアウトはどうだったか： 4.7</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• さまざまな先生がいろいろなことを教えてくれたのは、日本語がなるべく早く上達するのによかった。レベルも適当だった。ありがとうございました。</li> <li>• とてもよかった。しかし、教科書代はやや高い。</li> <li>• 教科書は日本語学習者にとって良かったと思う。</li> </ul>



<p>教師の教え方はどうだったか： 4.8</p>	<p>漢字の教科書は、私たちのような初級の学生にとって、とてもよかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教科書はとてもよかったが、教科書の値段はもう少し安いほうがよい。復習のため、文法のまとめや復習問題がある教材が必要だと思う。特に『みんなの日本語Ⅱ』のときに。</li> <li>第1週目は英語で行ったほうがよい。可能なら、授業時間を再考してほしい。本当に長く、とても早くから始まる。</li> </ul>
<p><b>(テスト)</b></p> <p>テストはどうだったか</p> <p>文法テスト： 4.5</p> <p>聴解テスト： 4.2</p> <p>会話テスト： 4.3</p> <p>テストは多かったか：</p> <p>多い5人、ちょうどよい1人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>テストはとてもよかった。テストの後で全ての問題を復習したほうがよい。カセットテープの音質はときどき悪く、ノイジーだった。</li> <li>テストはいつも難しかった。ときどきテープの音がクリアではなかった。</li> <li>テストの回数が多い。しかし、テストが必要なのは理解できる。</li> <li>2週間に1回のテストはよいが、最終テストは少し難しかった。</li> <li>聴解テストの音声は、テープのため、ときどき不明瞭だった。テストにビデオがあったらよい。音声だけでなく、ジェスチャーもあるからだ。</li> <li>会話を練習する時間がなかった。</li> </ul>
<p><b>(宿題)</b></p> <p>宿題はどうだったか： 4.0</p> <p>宿題は多かったか：</p> <p>多すぎる3人、多い2人、少ない1人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>とても良い練習で、私たちの能力向上に必要な。</li> <li>とてもよかった。家での練習は能力向上のため、役立った。</li> <li>宿題はよかった。しかし、スケジュールが忙しくて、できないことがあった。</li> <li>宿題は毎日の練習に必要なが、最初の1週間は練習だけでよいと思う。</li> <li>宿題の量が多く、時間が足りなかった。事前に次の日の予習もしなければならぬからだ。</li> <li>復習の時間まで理解できなかったため、家で宿題をするのが難しかった。</li> </ul>
<p><b>(コンピュータ授業)</b></p> <p>授業は役に立ったか： 4.3</p> <p>教材はどうだったか： 4.5</p> <p>教え方はどうだったか： 4.8</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ありがとうございます。今、私のコンピュータは100%日本語です。</li> <li>とても良い。</li> <li>教師の教授法はとてもよかったが、練習する十分な時間が足りなかった。</li> <li>もっと理解しやすくなるように、コンピュータ授業のための教科書がほしい。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業にソフトウェアを用いてはどうだろうか。モチベーションのため、インタラクティブなプログラムがよい。</li> </ul>
<p><b>(特別指導)</b>  特別指導はどうだったか： 5.0  特別指導は多かったか：  多い1人, 少ない4人, 少なすぎる1人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この授業にとっても感謝しています。1対1で先生と文法の問題点について話をして役立った。おかげで自信がついた。</li> <li>・特別指導はとてもよかった。</li> <li>・特別指導は私のような学生にとってとても重要だ。もし可能なら、もっと特別指導があったほうがよい。</li> <li>・学生にとって、とても有益だった。</li> <li>・復習するのにとても役立った。</li> <li>・とくべつしどうは一番たいせつなことです。チュートリアルの方がもっと必要だ。</li> </ul>
<p><b>(見学)</b>  見学は楽しかったか：  はい6人   見学場所は適当だったか：  はい6人   見学の時期は適当だったか：  はい5人  いいえ1人</p>	<p>何が楽しかったか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・すべて。場所、説明など。</li> <li>・ぜんぶたのしかったです。</li> <li>・この経験はとてもすばらしかった。とても楽しんだ。</li> <li>・訪問して、たくさんの文化を学ぶことができた。</li> <li>・すべてに感動した。</li> <li>・ともだちとせんせいのかわい。びじゅつが好きです。</li> <li>・この場所はとてもすばらしかった。留学生にとって、とても興味深い場所だ。</li> <li>・本当に素敵なところだった。</li> <li>・富山だけでなく、もう少し遠いところにも行ってみたい。</li> <li>・パーフェクト。もっと行きたい。</li> <li>・(日本事情のクラスで) 毎月見学に行けたらいい。日本の歴史的、文化的な場所に行って、文化を勉強したい。</li> <li>・雨が降っており、見学場所は山だったため、危なかった。</li> </ul>
<p><b>(ホームステイ)</b>  ホームステイ・ホームビジットは楽しかったか：  はい5人, 未記入1人</p>	<p>何が楽しかったか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家族、アクティビティなど。</li> <li>・日本人家族と生活したことは、本当に感動的だった。</li> <li>・たくさんのことが学べ、毎日日本人と会うことができた。</li> <li>・すべてがよかった。私たちは日本語でお互いにコミュニケーションをとらなければならなかった。</li> </ul>

<p>時期は適当だったか： はい4人 いいえ2人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私のかぞくはやさしかったです。</li> <li>・冬休みにまた会える機会があるので、とても良い時期だ。</li> <li>・この時期、私たちはまだ日本語が上手に話せなかったもので、1月下旬か、2月上旬がよいと思う。</li> <li>・もっと長い期間ホームステイできるので、休み期間中が最も良い。</li> </ul>
<p><b>(日本事情)</b> 日本人と一緒に勉強するのはどうだったか：  日本の文化を知らなければならぬと思うか： 思う6人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・とてもよかった。日本人学生にもっと日本語で話してほしい。もっと多くの日本人学生とたくさんアクティビティを行いたい。</li> <li>・留学生にとって一番重要な時間で、文化などを学ぶことができた。日本人学生と一緒に勉強することは本当に重要だ。</li> <li>・ここでの生活に適応するため、習慣を理解したり、日本人と良いコミュニケーションをとらなければならない。</li> <li>・日本に住むなら、その文化を学習し、何かをするための方法を知る必要がある。私はとてもたくさんを学んだ。</li> <li>・良い関係を築くために、たくさんを知ることが必要だから。</li> <li>・私たちは多くの状況で、どのようにすればよいかわからないときがあるため。</li> </ul>
<p><b>(口頭発表プロジェクト)</b> プロジェクトはたいへんだったか： とてもたいへん2人、たいへん1人、 ふつう2人、とてもかんたんだった1人 発表会は役に立ったか： 4.3</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語能力を向上させるのに、とても役立った。毎月1回スピーチがあればよい。</li> <li>・私たちの専門に関わる日本語を勉強し、練習できたので、とても役立った。スライドを作成し、文や発音を覚えるのはとてもむずかしかった。私たちをサポートしてくださった先生に感謝しています。今後も、このような機会があることを願っています。これからもよろしくおねがいいたします。</li> <li>・一生懸命に準備し、たくさんを学び、日本語能力も向上したので、とてもよかった。</li> <li>・わたしのスピーチはよくなかったですが、ともだちのスピーチはほんとうによかったです。</li> <li>・このプレゼンテーションはとてもむずかしかったが、とても楽しかった。私たちにとって、とても良い経験だったと思う。私の専門と日本の教育制度について勉強できた。本当にありがとうございました。</li> </ul>



本コースが役に立ったかという問いでは、第28期は全員が5段階評価の5点、第29期は4.8点と評価が高かった。また、自己の日本語の上達度についての問いにも、全員が「上達した」あるいは「少し上達した」と答えており、これらの点から受講者のコースに対する満足度は高かったということがうかがえる。しかしながら、スケジュールについては、1人を除き、「忙しすぎる」「忙しい」と回答している。既に実験や研究を開始して忙しい学生もおり、朝から夕方まで続く集中コースでの学習が大変だと感じられたのであろう。特に、コース開始時の進捗に対する自由意見が多く、この点について改善を図る必要がある。

日本語の授業についての問いでは、第28期は5点、第29期は4.3点と高い評価が得られた。両期の差については、上述したとおり、コース開始時に対する評価と推測できる。自由意見では、コース開始時に英語による説明を行ってほしいという記述が見られた。また、教科書・ハンドアウト・教師の教え方についても、高い評価が得られた。

また、テストについても第28期は5点、第29期は4.3点以上と高い評価が得られた。テストの実施回数は2人が「ちょうどいい」と回答したのに対し、7人が「多すぎる」「多い」と回答している。ただし、自由意見を見てみると、この点に関する記述は見られず、テストを評価するコメントが多く見られた。一方、聴解テストの音声に対する不満が多く見られた。記録媒体がカセットテープであるため、経年劣化し、聴き取りに支障が出てきている。今後、聴解テストを改訂する必要がある。

宿題については、29期のみ調査であったが、4点であった。これは授業進捗とも関係しており、宿題の量が多いというコメントが見られた。

コンピュータの授業については、第28期は4.7点、第29期は4.3点と高い評価が得られた。自由意見では、練習時間が不足していたという指摘や、教科書がほしいという希望が見られた。口頭発表プロジェクトに関して、第28期は5点、第29期は4.3点と高い評価が得られた。自由意見からも、プロジェクトの意義や有効性を受講者自身が感じ取ることができていると言ってよいだろう。

特別指導については、29期のみ調査であったが、第29期の調査項目の中で最も評価が高い5点であった。進捗が速いと感じていた学習者に対し、特別指導の時間では、マンツーマン形式で丁寧に指導できたことが高い評価につながったと思われる。特別指導の実施回数を増やしてほしいというコメントも多く、今後、教員をどのように配置するか検討する必要がある。

見学、ホームステイ・ホームビジット、日本事情についても全般的に高い評価が得られた。見学やホームステイ・ホームビジットは、日本の文化や習慣を直接体験できる場として、また日本事情の授業は、日本語のクラスで学んだ日本語を実際に運用できる場として、お互いの文化を学ぶ場として、とらえられているようである。

第29期より、アンケート調査の時期を変更したおかげで、学生から多くの自由意見が得られた。しかも、表面的なコメントではなく、評価すべき点と改善を希望する点が率直に書かれていた。本コースを改善するために、とても有益なコメントであったと言える。

## 8 コース改善に向けて

コース評価および定期テストの点数等を参考に、初級クラス学期末講師ミーティング（2014年2月29日開催）において、改善策を検討した。話し合いの結果、以下の3点を次年度より実施することとした。

### (1) 非漢字圏学習者の文字指導について

コース開始時、非漢字圏学習者が授業についていけなかったのは、「かな」がきちんと習得できていないことに原因があると考えられる。午後の技能別クラスの時間に『かなマスター』等を使って、毎日分担し「かな」を指導することにする。また、必要に応じて、ローマ字版の語彙リスト等を配布する。た

だし、いつまでローマ字版語彙リストを使用するかを見極めなければならない。

### (2) 定期テストの改訂について

コース評価では、聴解テストの音質改善を望む声が多かった。平成26年度中に改訂を進めることとした。

### (3) 教員間の連絡・情報共有について

学習者の「かな」習得状況等、教員間の情報共有が不足していた部分がある。今後は、以下の二つの方法で、情報共有を進めることとした。

- ① コース開始から一週間は「授業記録システム」の入力内容を共有すること。現在の「授業記録システム」はセキュリティの問題で、外部から閲覧することは不可能だが、入力した内容をテキストにして送信することは可能である。
- ② 学期中、定期的に講師ミーティングを開くこと。以前実施していたように、全員が出席できなくても、曜日をかえるなどして、講師同士が情報共有し、話し合いをする機会を持つ。

## 9 おわりに

大学院入学前予備教育・日本語研修コースは、2014年3月に第29期生を送り出した。これまでに文部科学省からの配置学生、学内措置による受講者を合わせて183人がこのコースを修了している。

日本語研修コースは、日本語課外補講との合同により、単独で授業を行っていた頃よりも授業が活発化していると感じられる。期によって受講者の人数や国籍、留学の目的などは異なるが、どのような構成であっても、合同クラス存在はどちらのプログラムを受講している学生にとっても、プラスになっていると思われる。今後も、国際交流センターの他の日本語プログラムとも連携をとりながら、改善の道を探っていかなければならない。

# 日本語課外補講報告（2013年4月～2014年3月）

濱田美和

## 1 はじめに

日本語課外補講は、富山大学に在籍する外国人留学生及び外国人研究者であれば誰でも受講できるプログラムである。日常生活や大学での学習・研究活動に必要な日本語の習得を目指して、初級、中級、上級の3つのレベル別クラスを開講している。2013年度は、前期（2013年4月～9月）と後期（2013年10月～2013年3月）にそれぞれ15週間開講した。

以下、2013年度の日本語課外補講の実施状況について報告する。なお、2005年10月に富山大学（五福キャンパス）、富山医科薬科大学（杉谷キャンパス）、高岡短期大学（高岡キャンパス）の3大学が再編・統合したことにより、富山大学で実施されている日本語課外補講は、五福キャンパスにおいて国際交流センター（旧留学生センター）が実施するものと、杉谷キャンパスにおいて医学部所属の日本語・日本事情担当教員が中心となり実施するものとの2つとなったが、本稿では、五福キャンパスで国際交流センターが実施している日本語課外補講について報告する。

## 2 受講者

前期は、初級クラスが5人、中級クラスが19人、上級クラスが16人（うち1人は中級クラスも同時に受講）、計39人が日本語課外補講を受講している。39人の在籍身分別の内訳は、大学院生11人、研究生10人、特別聴講学生6人、特別研究学生4人、科目等履修生（県費留学生）3人、日本語・日本文化研修留学生、教員研修生各2人、客員研究員1人となっている。国・地域別の内訳は、中国27人、ロシア3人、タイ、ベトナム各2人、ウガンダ、チェコ、バングラデシュ、ブラジル、ミャンマー各1人となっている。また、所属別の内訳は、理工学教育部11人、経済学部10人、人文学部6人、経済学研究科4人、人間発達科学部、人間発達科学研究科各2人、理学部、工学部、芸術文化学部、人文科学研究科各1人となっている。

後期は、初級クラスが11人、中級クラスが10人、上級クラスが31人（うち2人は中級クラスも同時に受講）、計50人が日本語課外補講を受講している。50人の在籍身分別の内訳は、特別聴講学生16人、大学院生14人、研究生7人、特別研究学生5人、日本語・日本文化研修留学生3人、教員研修生、科目等履修生（県費留学生）各2人、学部生1人となっている。国・地域別の内訳は、中国35人、韓国5人、ロシア4人、ウガンダ、キルギス、タイ、フィンランド、マレーシア、ミャンマー各1人となっている。また、所属別の内訳は、理工学教育部15人、人文学部13人、経済学部7人、人間発達科学部4人、工学部、経済学研究科各3人、芸術文化学部、人間発達科学研究科各2人、人文科学研究科1人となっている。

なお、日本語・日本文化研修留学生、及び、協定校からの短期留学生については、日本語課外補講上級クラスで開講している科目を、総合日本語コースの科目として受講している（詳細は、総合日本語コース報告を参照）。

## 3 授業担当者

前期は、センター専任教員3人（加藤扶久美、副島健治、濱田美和）、及び謝金講師（日本語研修コースとの合同授業については非常勤講師）9人（飯野令子、加藤敬子、高畠智美、中河和子、永山香織、藤田佐和子、松岡裕見子、要門美規、横堀慶子）が授業を担当した。後期は、センター専任教員3人（加藤扶久美、副島健治、濱田美和）、及び謝金講師（日本語研修コースとの合同授業については非常

勤講師) 8人(加藤敬子, 高島智美, 中河和子, 永山香織, 藤田佐和子, 松岡裕見子, 要門美規, 横堀慶子)が授業を担当した。前期, 後期ともに濱田美和がコーディネートをを行った。

#### 4 授業日程

前期は2013年4月8日(月)~7月26日(金)を授業期間とした。曜日調整のため, 5月1日(水)と7月16日(火)は月曜日の授業を行い, 7月25日(木)は休講とした。後期は2013年10月9日(水)~2014年2月10日(月)を授業期間とした。12月24日(火)~1月3日(金)は冬季休業, 1月17日(金)は大学入試センター試験準備日のため, 休講とした。また, 曜日調整のため, 11月6日(水)は金曜日, 1月16日(木)は月曜日の授業を行った。

オリエンテーションは, 前期は4月4日(木), 後期は10月7日(月)に開催した。専任教員5人(加藤扶久美, 副島健治, 田中信之, バハウ・サイモン・ピーター, 濱田美和)がオリエンテーションを行った。オリエンテーションの案内は, 国際交流センターのホームページに掲載する他, 日本語, 英語, 中国語の3カ国語表記で作成したポスターを五福キャンパス内の各学部及び国際交流センター談話室に掲示し, また, 学期初めに発行される国際交流センターニュースの掲示板でも紹介した。国際交流センターのホームページでは, 時間割や授業概要(日本語, 英語版を用意)の閲覧, それから, 受講申請書とふりがな入りの時間割もPDFファイルとしてダウンロードできるようになっている。オリエンテーションでは, 受講希望者一人一人とセンター専任教員が面接し, 受講者の日本語の習熟度に応じたクラスを紹介し, 受講申請書の提出により, 登録を行った。ただし, 来日時期が遅れる学生等については, コーディネーターが面接を行った上で, 開講期間の途中からの受講も認めた。

#### 5 授業内容

##### 5.1 時間割

前期, 後期ともに週38コマ授業を行った。前期の時間割を表1, 後期の時間割を表2に示す。

表1 2013年度前期 日本語課外補講時間割

曜	限	初級クラス	中級クラス	上級クラス
月	1	文法(加藤敬)	文法A(高島)	
	2	文法(加藤敬)	文法A(高島)	表現技術1(濱田)
	3	聴解(加藤扶)	漢字(濱田)	漢字1(高島)
火	1	文法(要門)	文法C(濱田)	
	2	文法(要門)	文法C(濱田)	作文1(松岡)
	3	生活日本語(要門)	語彙・表現(藤田)	会話1(松岡)
	4	生活日本語(加藤扶)		読解A1(藤田)
水	1	文法(高島)	文法A(中河)	
	2	文法(高島)	文法A(中河)	読解B1(永山)
	3	文字・漢字(加藤扶)	会話(横堀)	日本文化1(中河)
木	1	文法(横堀)	文法B(副島)	
	2	文法(横堀)	文法B(副島)	
	3		聴解(横堀)	聴解1(要門)
金	1	文法(永山)	文法B(松岡)	
	2	文法(永山)	文法B(松岡)	文法1(飯野)
	3	会話(飯野)		

\* 1限8:45~10:15, 2限10:30~12:00, 3限13:00~14:30, 4限14:45~16:15

\* 網掛けの授業科目は, 日本語研修コースとの合同授業

表2 2013年度後期 日本語課外補講時間割

曜	限	初級クラス	中級クラス	上級クラス
月	1	文法 (加藤敬)	文法 A (高島)	
	2	文法 (加藤敬)	文法 A (高島)	表現技術2 (濱田)
	3	聴解 (加藤扶)	漢字 (濱田)	漢字2 (高島)
火	1	文法 (要門)	文法 C (加藤扶)	
	2	文法 (要門)	文法 C (加藤扶)	作文2 (松岡)
	3	語彙・表現 (藤田)		会話2 (松岡)
	4			読解 A2 (藤田)
水	1	文法 (高島)	文法 A (中河)	
	2	生活日本語 (加藤扶)	文法 A (中河)	読解 B2 (永山)
	3	文字・漢字 (加藤扶)	会話 (横堀)	日本文化2 (中河)
木	1	文法 (横堀)	文法 B (副島)	
	2	生活日本語 (要門)	文法 B (副島)	
	3		聴解 (横堀)	聴解2 (要門)
	4			
金	1	文法 (永山)	文法 B (松岡)	
	2	文法 (永山)	文法 B (松岡)	文法2 (横堀)
	3	会話 (松岡)		

\* 1限8:45～10:15, 2限10:30～12:00, 3限13:00～14:30, 4限14:45～16:15

\* 網掛けの授業科目は、日本語研修コースとの合同授業

## 5.2 初級クラスの授業内容

前期、後期ともに、月曜日から金曜日まで毎日午前中2コマ連続で「文法」の授業と、午後に「聴解」、「会話」、「文字・漢字」、「語彙・表現」の授業を各1コマ行った。また、毎日日本語の授業に出席することが困難な学生のために、「生活日本語」の授業を週2コマ設けた。

週10コマの「文法」の授業では、『みんなの日本語 初級』I, II (スリーエーネットワーク) をメインテキストとして、1日1課ないしは2日に1課のペースで初級文型の導入及びその定着のための練習を行った。授業の最初に、『毎日の発音練習』(独自開発教材) を用いた発音練習も適宜取り入れた。

表3 初級クラス「文法」(『みんなの日本語 初級』)の授業進度

第1週	1課～4課		第9週	30課～32課	
第2週	5課～7課	1課～6課試験	第10週	33課～35課	26課～32課試験
第3週	8課～11課		第11週	36課～38課	
第4週	12課～14課	7課～12課試験	第12週	39課～41課	33課～38課試験
第5週	15課～18課		第13週	42課～45課	
第6週	19課～22課	13課～18課試験	第14週	46課～48課	39課～45課試験
第7週	23課～26課		第15週	49課～50課	日本語能力試験
第8週	27課～29課	19課～25課試験		復習	旧3級模擬試験

「聴解」の授業では『みんなの日本語初級 聴解タスク25』(スリーエーネットワーク) を用い、初級クラス「文法」(『みんなの日本語 初級』)の授業進度に合わせて、聴解練習を中心に行った。

「会話」の授業では、午前の「文法」の時間に学んだ文法事項を使って、特に話す力を身につけるための応用練習を行った。



「語彙・表現」の授業では、午前の「文法」の時間に学んだ語彙や表現をより正確に理解し、正しく使えるようになるための練習を中心に行った。

「文字・漢字」の授業では、『ストーリーで覚える漢字300』（くろしお出版）をメインテキストとして、1日の授業で1課進むペースで、ひらがな、カタカナ、漢字の読み書きの練習を中心に行った。

週2コマの「生活日本語」の授業では、『Basic Japanese for Students はかせ』〈1〉（スリーエーネットワーク）をメインテキストとして、週2回の授業で1～2課進むペースで初級文型の導入及び会話力を伸ばすための練習を中心に行った。

なお、前期については、月曜2限と木曜2限に開講予定だった「生活日本語」を、高岡キャンパスからの受講者のスケジュールにあわせて、火曜3限と4限に変更した。そして、同じく後期についても、月曜2限に開講予定だった「生活日本語」を高岡キャンパスからの受講者のスケジュールにあわせて、水曜2限に変更した。

### 5.3 中級クラスの授業内容

前期、後期ともに、午前中は週2日「文法A」、週2日「文法B」、週1日「文法C」の授業をいずれも2コマ連続で行い、午後に「聴解」と「会話」と「漢字」の授業を各1コマ行った。

「文法A」の授業では、『ジェイ・ブリッジ』（凡人社）をメインテキストとして、5日（9コマ）の授業で1課進むペースで、初級の文型や表現を整理、復習するとともに、中級の文型や表現を導入し、それらを大学生生活で遭遇する場面や様々なトピックに合わせて、運用できるよう談話練習なども行った。

「文法B」の授業では、『日本語中級J301』、『日本語中級J501』（スリーエーネットワーク）をメインテキストとして、『日本語中級J301』は1日（2コマ）の授業で1課進むペース、『日本語中級J501』は2日（4コマ）の授業で1課進むペースで、それぞれ中級の語彙や文法事項を導入し、主に読解の力を伸ばすための練習を行った。

「文法C」の授業では、『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をメインテキストとして、1日（2コマ）の授業で1課進むペースで、初級文型の確認をしながら、初中級レベルの文型と表現の導入及び練習を行った。

「聴解」の授業では、『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ 聴解 中級』（スリーエーネットワーク）等を用い、中級の語彙や表現を確認しながら、聴解練習を行った。

「会話」の授業では、「文法」の授業でのメインテキスト『日本語中級J301』、『日本語中級J501』を部分的に用いて、話し合いの練習やプレゼンテーションの練習を中心に、大学生生活や日常生活で出会う場面に応じた日本語を使って、適切に話すための練習を行った。

「漢字」の授業では、『漢字1000PLUS INTERMEDIATE KANJI BOOK』Vol.1（凡人社）を使用し、読み方、書き方及び意味・用法の全体的な指導を行った。初級レベルの漢字の習得が十分にできていない学生がいたため、その学生に対しては『ストーリーで覚える漢字300』（くろしお出版）を用いて授業を行った。

### 5.4 上級クラスの授業内容

前期、後期ともに、「読解」の授業を週2コマ、「作文」、「聴解」、「会話」、「文法」、「表現技術」、「日本文化」の授業をそれぞれ週1コマ行った。上級クラスの授業は、2期連続して受講する学生のために、以前から前期と後期で扱うテーマや教材等を変えて対応していたが、2010年度より前期は科目名の末尾に「1」、後期は「2」を付けて、それぞれの違いを科目名でも表すことにした。ただし、授業目的や進め方等の授業概要は同じであるため、以下、まとめて報告する。

「読解」の授業は、「読解A」と「読解B」の2科目を設けた。「読解A」は、前期は『日本語能力



試験N1/N2 試験に出る読解』（桐原書店），後期は『新完全マスター読解 日本語能力試験N1』（スリーエーネットワーク）をメインテキストとし、発音の指導，表現や文型練習なども取り入れながら読解練習を行った。「読解B」は，現代日本社会の問題を扱った新聞記事，文学作品，教養書などの生教材を利用し，初めに論理構成を把握させ，効率的な読みの練習を心がけた。ブックレポート作成の練習も行った。

「作文」の授業では，コンピュータを使用しながら，レポートや論文を書く際に必要となる論理的な文章の書き方の練習を行った。『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』（スリーエーネットワーク），『大学・大学院留学生の日本語4 論文作成編』（アルク）等を参考書とし，練習問題等は電子ファイルで提供した。

「聴解」の授業では，日本語の聴解教材とあわせて，テレビやラジオ，インターネットなど，様々なメディアを用いて，大学生活や日常生活に必要な聴解練習を行った。

「会話」の授業では，ロールプレイ等の会話練習等を通して，大学生活や日常生活で出会う場面，状況での会話力を伸ばす練習を行った。また，様々なトピックについて日本語で的確に説明・描写する練習，意見や感想を述べる練習を行った。

「文法」の授業では，前期は『新完全マスター文法 日本語能力試験N1』（スリーエーネットワーク），後期は『日本語能力試験レベルアップトレーニングN1』（アルク）をメインテキストとし，大学での学習，研究生活に必要な上級レベルの文法・表現について，演習形式で確認した。日本語能力試験の受験対策もあわせて行った。

「表現技術」の授業では，目上の人とのやりとりや，不特定多数の人に対して情報発信する際に必要となる，フォーマルな場で用いられる日本語の表現を確認した後，メールやメモなど日常的・実用的な文章の書き方やプレゼンテーション・スライドを利用したの口頭発表の練習を行った。

「日本文化」の授業では，テレビ番組，アニメ映画，漫画，新聞・雑誌記事，自治体広報などの様々なメディアを使用して，震災と日本，日本の中の外国人，ジェンダー，ポップカルチャーといった視点から現代日本社会の問題を考えた。

「漢字」の授業では，『漢字1000PLUS INTERMEDIATE KANJI BOOK』Vol.2（凡人社）を使用して，読み方，書き方及び意味・用法の全体的な指導を行った。前の期から継続して受講している学生及び漢字，語彙能力の高い学生に対しては新聞記事等の生教材を使用してさらなる語彙の拡充を図った。

## 6 試験

初級クラス「文法」，「聴解」，「会話」では，7回の定期試験を実施した。定期試験の内容は，筆記試験，聴解試験，会話試験で，いずれの試験も日本語研修コース初級クラスと同じものを使用した。初級クラス「語彙・表現」では期末試験を実施し，「文字・漢字」では毎回の授業で確認テストを実施した。中級クラスでは，「文法A」は2回の定期試験，「文法B」は3回の定期試験，「文法C」は2回の定期試験，「聴解」は期末試験，「漢字」は毎回の授業での確認テストと2回の定期試験を実施し，「会話」は授業中に発表を課した。上級クラスでは，「読解A」，「読解B」，「文法」は期末試験，「漢字」は毎回の授業での確認テストと2回の定期試験を実施し，「作文」，「聴解」，「会話」，「表現技術」，「日本文化」は期末レポートあるいは発表を課した。

## 7 授業評価

日本語課外補講の受講者に対して，授業内容とカリキュラムに関するアンケート調査を前期と後期の授業期間中に実施した。授業内容に関するアンケートはクラス別に集計し，カリキュラムに関するアンケートは回答者全員分をまとめて集計した。

授業内容に関するアンケートは，いずれのクラスにおいても，基本的に科目ごとに実施したが，同一

の教科書（『みんなの日本語 初級』）を使用した科目（初級クラス「文法」、「聴解」、「会話」、「語彙・表現」）についてはまとめて実施した。

以下、表4に前期初級クラス、表5に前期中級クラス、表6に前期上級クラス、表7に後期初級クラス、表8に後期中級クラス、表9に後期上級クラスの授業内容のアンケート集計結果をまとめた。授業内容に関するアンケートでは、中級、上級クラスについては、1人の学生が複数の授業科目に答えているため、括弧内の人数はいずれも延べ人数を表す。評点は5段階評価で、値が大きいほど良い評点であることを示す。「とてもよかった」を5点、「よかった」を4点、「ふつう」を3点、「あまりよくなかった」を2点、「ぜんぜんよくなかった」を1点として、その平均点を出したものである。

カリキュラムに関するアンケート調査は、1人の学生が1回のみ回答することになっている。表10に前期、表11に後期の結果をまとめた。

なお、自由記述については一部英語での回答もあったが、筆者が日本語に翻訳した。また、日本語の表記や助詞等の間違いは修正して掲載した。

表4 前期初級クラスの授業内容についてのアンケート結果（回答者6人）

質問項目（回答者数）	評点	自由記述
1. 授業内容 とてもよかった（4人） よかった（2人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.7	
2. 授業のレベル とてもよかった（2人） よかった（4人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.3	
3. 授業の進度 とてもよかった（4人） よかった（2人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.7	
4. 教科書・プリント とてもよかった（2人） よかった（4人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.3	・新しい教材のほうが良いと思います。(文法他) ・教科書はあまりよくないです。詳しい本がもっといいです。『標準日本語』がもっといいです。(文法他)
5. 教え方 とてもよかった（2人） よかった（4人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.3	
6. どのぐらい出席したか 80%～100%（6人） 60%～80%（0人） 40%～60%（0人）	—	欠席した理由 ・専門の授業やゼミがあったから（0人） ・アルバイトがあったから（0人） ・病気のため（0人）

20%～40% (0人) 0%～20% (0人)		<ul style="list-style-type: none"> <li>その授業に興味がなかったから (0人)</li> <li>その他 (0人)</li> </ul>
7. 予習・復習をしたか かなりした (5人) すこしした (1人) ぜんぜんしなかった (0人)	—	

その他

- 日本語の力をもっとつけるためには、もっと授業時間が多いほうがいいと思う。(生活日本語)

表5 前期中級クラスの授業内容についてのアンケート結果 (回答者31人)

質問項目 (回答者数)	評点	自由記述
1. 授業内容 とてもよかった (21人) よかった (10人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.7	<ul style="list-style-type: none"> <li>もっと自分で発表するほうがいいと思う。(会話)</li> </ul>
2. 授業のレベル ちょうどよかった (20人) よかった (10人) ふつう (1人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.6	
3. 授業の進度 ちょうどよかった (18人) よかった (10人) ふつう (0人) あまりよくなかった (2人) ぜんぜんよくなかった (0人) 無回答 (1人)	4.3	<ul style="list-style-type: none"> <li>遅すぎた。(会話)</li> <li>遅すぎた。もっと速いほうがいいと思う。(聴解)</li> </ul>
4. 教科書・プリント とてもよかった (17人) よかった (13人) ふつう (1人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.5	
5. 教え方 とてもよかった (24人) よかった (7人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.8	
6. どのぐらい出席したか 80%～100% (29人) 60%～80% (1人) 40%～60% (1人) 20%～40% (0人) 0%～20% (0人)	—	欠席した理由 <ul style="list-style-type: none"> <li>専門の授業やゼミがあったから (2人)</li> <li>アルバイトがあったから (0人)</li> <li>病気のため (0人)</li> <li>その授業に興味がなかったから (0人)</li> <li>その他 (1人)：一時帰国</li> </ul>
7. 予習・復習をしたか かなりした (15人) すこしした (16人) ぜんぜんしなかった (0人)	—	

その他

- ・教科書全部勉強してほしいです。(文法A)
- ・文法Bの勉強を通して、いろいろな文法、ことばがわかるようになってきた。日本語のレベルアップのためにとてもいいクラスです。(文法B)
- ・このクラスでの勉強を通して、聞く能力のレベルが高くなってきた。とてもいいクラスですね。(聴解)

表6 前期上級クラスの授業内容についてのアンケート結果 (回答者42人)

質問項目 (回答者数)	評点	自由記述
1. 授業内容 とてもよかった (26人) よかった (16人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生の授業が面白いです。説明もはっきりし、いろいろなことを勉強しました。(読解A)</li> <li>・読解の授業はとても面白かったです。日本語能力もアップしたと思います。(読解B)</li> <li>・楽しかったです。(聴解)</li> <li>・様々なビデオを見て、体験をして、日本語だけではなくて、日本文化について知識が深くなりました。(聴解)</li> <li>・ビデオとか資料とかいろいろ用意してくださって、ありがとうございます。(聴解)</li> <li>・役に立ったと思う。(会話)</li> <li>・日本語で表現することが上達し、とても勉強になりました。(会話)</li> <li>・メールの書き方はとても役立ちました。(表現技術)</li> <li>・敬語の使い方は役に立つと思います。(表現技術)</li> <li>・いろいろなことは現在の日本を描いていたのでおもしろかったと思う。(日本文化)</li> <li>・日本文化についていろいろ勉強になりました。授業内容が興味深かったです。(日本文化)</li> </ul>
2. 授業のレベル ちょうどよかった (31人) よかった (11人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上級に相当する。(読解A)</li> <li>・大学院入試とN1試験のために、読解のクラスに申し込みました。レベルがあまり高くないレベルからだんだん上がってきた。よかったと思います。(読解A)</li> <li>・特にビデオの内容は上級レベルに相当します。(聴解)</li> <li>・いろいろ日本文化についての勉強をした上で、聴解の能力も高められました。(聴解)</li> <li>・新しい言葉を教えてもらって、参考になった。(日本文化)</li> </ul>
3. 授業の進度 ちょうどよかった (25人) よかった (17人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上級のレベルのためにたくさん練習した。よかったと思う。(読解A)</li> <li>・様々な練習をしてよかった。(聴解)</li> <li>・もう少し速いほうがいいと思います。(聴解)</li> </ul>
4. 教科書・プリント とてもよかった (23人) よかった (19人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『N1・N2読解』という教科書は難しいと思う。(読解A)</li> <li>・わかりやすいプリントをもらいました。(聴解)</li> <li>・NHKとか日本の歴史についてのビデオがあったのでよかった。(聴解)</li> </ul>
5. 教え方 とてもよかった (31人) よかった (11人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わからないところがあったら、先生はうまく説明してくれた。(読解A)</li> <li>・困ったことがあったら、先生からすぐに詳しい説明をもらいました。(聴解)</li> <li>・先生が私たちのわからない単語とかをちゃんと説明してくれました。よかった。(聴解)</li> </ul>

6. どのぐらい出席したか 80%~100% (26人) 60%~80% (6人) 40%~60% (5人) 20%~40% (5人) 0%~20% (0人)	—	欠席した理由 ・専門の授業やゼミがあったから (6人) ・アルバイトがあったから (4人) ・病気のため (16人) ・その授業に興味がなかったから (0人) ・その他 (0人)
7. 予習・復習をしたか かなりした (16人) すこしした (23人) ぜんぜんしなかった (3人)	—	・テキストについて毎回テストのようなものをしていました。予習しないほうが良いと思います。(読解A) ・この聴解の授業が私の日本語の聞く能力を伸ばしました。(聴解) ・敬語についてとても勉強になりました。(表現技術)

その他

- ・母語と日本語の違いが非常に大きいから、私には日本語の読解が難しかった。前期の間がんばって、レベルを上げ、読解の能力を伸ばしたいと思う。(読解A)
- ・練習をたくさんしたいです。練習のプリントがほしいです。覚えやすい練習がしたいです。(文法)
- ・とても親切な先生です。私は来日したばかりのとき、自分の日本語のレベルを疑いました。とても緊張していました。先生に助けってもらって、良い印象が残りました。(聴解)
- ・私は今年の4月に来日して、うまく日本語で会話ができませんでした。今は、たくさんのことを勉強し、日本語能力がアップしました。(会話)
- ・私は漢字がとても好きですが、留学する前にたくさん困ったことがありました。漢字クラスを選んで、たくさん漢字を覚えて、自分の日本語能力がアップしたと思います。漢字がもっと好きになりました。(漢字)
- ・この一年間お世話になりました。この授業を二回取って、いろいろ勉強になりました。本当にどうもありがとうございました。(表現技術)
- ・私は来日したころ、敬語がよくわかりませんでした。しかし、今、能力がアップしたと思います。(表現技術)
- ・とても勉強になりました。(表現技術)
- ・この授業で、日本文化を様々な角度から勉強してきました。知識のほか、クラスメートとよく議論したり、自分の意見を皆の前で発表したりして、この面での能力を伸ばしてきました。本当にありがとうございました。(日本文化)

表7 後期初級クラスの授業内容についてのアンケート結果 (回答者8人)

質問項目 (回答者数)	評点	自由記述
1. 授業内容 とてもよかった (6人) よかった (2人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.8	
2. 授業のレベル とてもよかった (6人) よかった (2人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.8	
3. 授業の進度 とてもよかった (4人) よかった (4人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.5	
4. 教科書・プリント とてもよかった (7人) よかった (1人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.9	・とても便利です。(文法他)

5. 教え方 とてもよかった (7人) よかった (1人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・とても思いやりがある。(文法他)</li> <li>・先生は全員親切で、楽しい。やさしい。(文法他)</li> <li>・先生はよかった。(文字・漢字)</li> </ul>
6. どのぐらい出席したか 80%~100% (5人) 60%~80% (3人) 40%~60% (0人) 20%~40% (0人) 0%~20% (0人)	—	欠席した理由 <ul style="list-style-type: none"> <li>・専門の授業やゼミがあったから (5人)</li> <li>・アルバイトがあったから (0人)</li> <li>・病気のため (4人)</li> <li>・その授業に興味がなかったから (0人)</li> <li>・その他 (0人)</li> </ul>
7. 予習・復習をしたか かなりした (4人) すこしした (4人) ぜんぜんしなかった (0人)	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語は少し難しい。(文法他)</li> </ul>

その他

- ・アートのことばが勉強したかった。(生活日本語)
- ・先生はいいです。クラスは楽しかったです。(文法他)
- ・天気が悪いとき、雪が降ります。学校へ来るのは難しい。(文法他)
- ・日本の漢字は難しい。(文字・漢字)
- ・富山大学の日本語の授業はいいです。(文字・漢字)

表8 後期中級クラスの授業内容についてのアンケート結果 (回答者16人)

質問項目 (回答者数)	評点	自由記述
1. 授業内容 とてもよかった (12人) よかった (4人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生は日本社会や習慣などいろいろ教えてくれましたので、楽しかったです。(文法A)</li> <li>・おもしろいです。(文法A)</li> <li>・おもしろかったです。(会話)</li> <li>・どのクラスも楽しみ、いつも次のクラスが楽しみでした。日本語で会話するのはとても良い経験でした。このクラスを受けられなくなるのが残念です。(会話)</li> <li>・文法やことばを間違えると、すぐ先生に直してもらえました。とてもいい勉強になりました。日本語が上手に話せるようになりました。(会話)</li> <li>・日本語を聞いてから、理解できるように教えていました。とても役に立ちました。(聴解)</li> <li>・このクラスは、日本や日本文化についてたくさん学んだので、とても役に立ちました。日本での生活が楽になりました。本当にありがとうございます。(聴解)</li> </ul>
2. 授業のレベル ちょうどよかった (11人) よかった (3人) ふつう (2人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文法の部分はちょっと遅かったですが、話すことに役に立ちます。(文法A)</li> <li>・はじめはちょっと難しかったから大変でしたけど、今はこれがむしろよかったと思います。ありがとうございます。(文法A)</li> <li>・日本人が言っていることを聞くことができる。(会話)</li> </ul>
3. 授業の進度 ちょうどよかった (12人) よかった (3人) ふつう (1人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・よかったと思う。(会話)</li> </ul>



4. 教科書・プリント とてもよかった (10人) よかった (5人) ふつう (0人) あまりよくなかった (1人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.5	<ul style="list-style-type: none"> <li>あまりよくなかった。新しい教科書を使ったほうが良いと思います。(文法C)</li> </ul>
5. 教え方 とてもよかった (16人) よかった (0人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	5.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>自由に意見を話させたり，問題を聞いたりしていました。とてもやさしい先生方です。(文法A)</li> <li>私は先生の教授スタイルが好きです。クラスにやる気を起こさせるので，より積極的に参加するようになります。(会話)</li> <li>雰囲気がとても良かったです。積極的に勉強させました。(会話)</li> </ul>
6. どのぐらい出席したか 80%～100% (15人) 60%～80% (1人) 40%～60% (0人) 20%～40% (0人) 0%～20% (0人)	—	<p>欠席した理由</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>専門の授業やゼミがあったから (1人)</li> <li>アルバイトがあったから (0人)</li> <li>病気のため (7人)</li> <li>その授業に興味がなかったから (2人)</li> <li>その他 (3人)</li> </ul>
7. 予習・復習をしたか かなりした (8人) すこしした (8人) ぜんぜんしなかった (0人)	—	

表9 後期上級クラスの授業内容についてのアンケート結果 (回答者60人)

質問項目 (回答者数)	評点	自由記述
1. 授業内容 とてもよかった (34人) よかった (26人) ふつう (0人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章についての知識を詳しく教えていただけるといいと思います。(読解A)</li> <li>いい勉強になりました。(読解A)</li> <li>この授業を通して日本文化についてよくわかってきました。(読解B)</li> <li>文法の授業は本当に役に立つ大変面白い授業です。(文法)</li> <li>とてもN1の試験に役に立つと思います。(文法)</li> <li>先生は毎回充実した内容を準備してくださって，いろいろ勉強になったと思います。初めは，レポートの書き方すらわからなかったんですが，先生の指導のおかげで，レポートが型になってきました。(作文)</li> <li>本格的なレポートを書く技術を学びました。これはよかったと思います。(作文)</li> <li>ニュースなど見せていただき，良かったです。(聴解)</li> <li>ビデオはとてもおもしろかったと思います。多くの新しいことを知りました。(聴解)</li> <li>授業で日本語を話す機会が十分に与えられました。それは良かったです。(会話)</li> <li>表現技術の授業で敬語の練習をした知識は将来に役に立つと思う。本当にありがとうございました。(表現技術)</li> <li>先生のおかげで日本語の敬語の知識の特徴を身につけられました。大変いい勉強になりました。文法だけでなく日本のことを教えてくださってありがとうございます。(表現技術)</li> <li>日本文化の授業のおかげで日本人の考え方がもう少しわかるようになったかもしれません。(日本文化)</li> <li>テーマに関するビデオを見てよかったと思う。(日本文化)</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「日本文化」としての授業から、いろいろな日本の文化を理解させてもらった。本当にいい授業です。(日本文化)</li> <li>・DVDの番組の内容がおもしろくて勉強になった。(日本文化)</li> <li>・思っていた日本文化という授業とは違う。(日本文化)</li> <li>・日本の文化について、より深く理解させられた。(日本文化)</li> <li>・チームワーク,グループ練習でiPad,カードを使ったりしたから,漢字も覚えやすくて,グループのワークもよくなりました。(漢字)</li> </ul>
2. 授業のレベル ちょうどよかった (39人) よかった (19人) ふつう (2人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・N1に合格すると思う。(読解A)</li> </ul>
3. 授業の進度 ちょうどよかった (36人) よかった (17人) ふつう (7人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私の日本語レベルにちょうど合っている。(読解A)</li> <li>・先生がシャトルカードを配って、返事をしますので、何か疑問があったら、すぐ答えをもらいます。(文法)</li> <li>・私にとって時々速すぎた。(表現技術)</li> <li>・復習するためにだいぶ時間があって、よかったです。(日本文化)</li> <li>・私にとって時々速すぎた。(漢字)</li> </ul>
4. 教科書・プリント とてもよかった (41人) よかった (17人) ふつう (2人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書の内容と練習はとてもN1のレベルに対応していると思います。(読解A)</li> <li>・教科書の課題はN1に近いと思うので、この試験を受ける時に役に立つと思います。(読解A)</li> <li>・とても役に立った。(読解B)</li> <li>・毎回ファイルをメールからダウンロードしても、筋はちょっと混乱します。テキストみたいなものがあつたらよかったと思います。(作文)</li> <li>・毎回丁寧にプリントを配ってくれて、ありがとうございます。(聴解)</li> <li>・プリントの中に説明があり、わかりやすい。(聴解)</li> <li>・ときどきすばらしいプリントがあつた。(日本文化)</li> <li>・DVDとかでいろいろな番組を見たり、議論するのはふさわしいと思っている。(日本文化)</li> <li>・教科書以外も教材があつてよかったです。(漢字)</li> </ul>
5. 教え方 とてもよかった (50人) よかった (9人) ふつう (1人) あまりよくなかった (0人) ぜんぜんよくなかった (0人)	4.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読解に現れた用語をきちんと解釈してくれた。読解力が向上するとともに、ほかの知識も少しずつ身につくようになった。(読解A)</li> <li>・授業をするとき、皆さんと一緒に円形で座ることによって、かなり集中できるようになりました。(読解A)</li> <li>・難しい言葉をわかりやすくしてくださって、ありがとうございます。(読解A)</li> <li>・分かりやすく説明したり、1人1人の学生の能力にふさわしい方法を選んで授業をしてくれた。コミュニケーションのいい先生です。(作文)</li> <li>・説明した内容はとても理解しやすいと思います。(作文)</li> <li>・毎回の授業で、丁寧に教えてくれて、ありがとうございます。最後のレポートの授業は今後の勉強に役に立つと思います。(作文)</li> <li>・何かあつたら、すぐに詳しい説明をしてもらった。(聴解)</li> <li>・わかりやすく説明したり、1人1人の意見を大切にする先生です。グループに分かれての教え方。(日本文化)</li> <li>・話す機会が結構あつたと思う。グループごとに議論することが好きだ。(日本文化)</li> <li>・完璧!!! (漢字)</li> </ul>

6. どのぐらい出席したか 80%~100% (53人) 60%~80% (6人) 40%~60% (0人) 20%~40% (1人) 0%~20% (0人)	—	欠席した理由 ・専門の授業やゼミがあったから (3人) ・アルバイトがあったから (0人) ・病気のため (15人) ・その授業に興味がなかったから (0人) ・その他 (3人) : 旅行 (1人)
7. 予習・復習をしたか かなりした (26人) すこした (34人) ぜんぜんしなかった (0人)	—	・宿題があまりないので、気軽に授業を受けることができます。(読解A) ・ほとんど毎回宿題があるので、新しいものを勉強しながら、勉強したものを復習します。(文法) ・毎週もらったワークシートがわかりやすく、各授業の内容を復習するために役に立った。(漢字)

その他

- ・教科書の問題を完成させるだけでなく、文章の構成とか、重要な言葉とかを詳しく説明していただくとよかったですと思います。(読解A)
- ・N1を受けるために、とてもいい授業だと思います。また、先生の教え方はとてもわかりやすかったので、いい勉強になりました。どうもありがとうございました。(読解A)
- ・読解Bの授業のおかげで、私は読む能力を伸ばしただけでなく、様々な分野における知識も広がったし、発表の能力もついたかもしれません。(読解B)
- ・前期と後期に読解Bを選んで、先生のおかげで読解能力が向上した。(読解B)
- ・そろそろ帰国日が近づいています。先生、いろいろお世話になりました。ありがとうございました。(聴解)
- ・この間、様々なことを教えてもらって本当にありがとうございます。特に、敬語の使い分けがわかるようになったことが最も大きい収穫でした。(表現技術)
- ・日本文化の授業が私にとって日本の生活の分野を広げるものとなった。いろいろなテーマについて話して、日本人の性格がわかるようになった。(日本文化)
- ・私はもともと漢字がとても苦手だったので、漢字の授業前にはいろいろな心配があったが、この授業時間のおかげで、以前より多くの漢字がわかるようになりました。(漢字)
- ・私は漢字に深く興味があるので、毎週漢字の授業で勉強するだけでなく、楽しんでいました。この1年の留学期間中、本当にありがとうございました。(漢字)
- ・漢字の授業は好きな授業の1つになりました。そして、そのおかげで漢字の知識が増えたと思います。(漢字)

表10 前期のカリキュラムについてのアンケート結果 (回答者22人)

1. 日本語課外補講をどこで知ったか (複数回答)	オリエンテーション出席者(14人) ・オリエンテーションの掲示を見た(2人) ・学部の教員にきいた(1人) ・留学生センターの教員にきいた(9人) ・友だちにきいた(2人) オリエンテーション欠席者(6人) ・学部の教員にきいた(1人) ・留学生センターの教員にきいた(2人) ・友だちにきいた(1人) ・その他(2人) : インターネットで調べた
2. 授業科目数の希望	今のままでいい(19人) : 初級3人, 中級12人, 上級4人 多くしてほしい(2人) : 初級(文法他) 2人…会話 少なくしてほしい(1人) : 中級1人…文法Cは簡単だ
3. 授業科目の希望	今のままでいい(20人) : 初級3人, 中級13人, 上級4人 新しい科目を作ってほしい(2人) : 初級2人…見学
4. 来期の授業時間帯の希望	専門の時間割がわからないのでたえられない(10人) : 初級2人, 中級5人, 上級3人 午前1・2限(5人) : 初級1人, 中級4人 午後3・4限(4人) : 初級1人, 中級3人 いつでもいい(1人) : 中級1人 その他(2人) : 初級2人…帰国します。/ 昼休み

その他

- ・日本人と留学生の対話があれば、留学生はもっと日本語力に自信が持てるようになると思う。(初級 生活日本語)
- ・全部よかったから、何も変える必要はありません。(上級)

表11 後期のカリキュラムについてのアンケート結果 (回答者13人)

1. 日本語課外補講をどこで知ったか (複数回答)	オリエンテーション出席者(10人) ・学部の教員にきいた(3人) ・国際交流センターの教員にきいた(3人) ・友だちにきいた(2人) ・無回答 (2人) オリエンテーション欠席者(3人) ・学部の教員にきいた(2人) ・無回答 (1人)
2. 授業科目数の希望	今のままでいい(12人) : 初級5人, 中級5人, 上級2人 多くしてほしい(1人) : 中級1人
3. 授業科目の希望	今のままでいい(11人) : 初級5人, 中級4人, 上級2人 新しい科目を作ってほしい(2人) : 中級2人
4. 来期の授業時間帯の希望	専門の時間割がわからないのでこたえられない(5人) : 初級2人, 中級3人 午前1・2限(2人) : 初級1人, 中級1人 午後3・4限(1人) : 中級1人 いつでもいい(2人) : 初級2人 その他(3人) : 初級1人, 上級2人…帰国します。

その他

- ・教科書や教材や教授法がよかった。そして、先生もよく、思いやりがあった。全体的にとってもいい日本語プログラムだった。(初級)
- ・文法Bの教科書は古いから、新しい教科書を使ったほうがいいと思います。(中級)
- ・楽しかったです。(中級)

まず、各クラスの授業内容に関するアンケート結果については、全体の8割以上が4.5点以上となっており、概ね良い評価を得ていると言ってよいだろう。

数は少なかったが、今後のコース改善に向けての検討材料とするために、「あまりよくなかった」、「全然よくなかった」という回答を詳しく見ておきたい。「よくなかった」という回答は、前期については中級クラスの授業進度で、後期については中級クラスの教科書で見られた。

前期の中級クラスの授業進度については、「聴解」と「会話」でそれぞれ「あまりよくなかった」という回答者が1人いた。いずれも遅すぎたことを理由に挙げていた。後期中級クラスの教科書については、「文法C」で「あまりよくなかった」という回答者が1人いた。新しい教科書を使ったほうがいいという意見を述べていた。少数意見ではあるが、今後のアンケート結果も見ながら対応について検討していきたい。

次に、カリキュラムに関するアンケート結果を見ると、日本語課外補講に関する情報は、教員や友人からきいたという回答が多かった。授業科目数や内容については「今のままでいい」という回答がいずれの期も最も多かったが、初級クラスと中級クラスで授業科目数を多くしてほしい、新しい科目を設けてほしいという要望が見られた。授業科目数を少なくしてほしいという回答者が前期の中級クラスで1人見られ、「文法Cは簡単だ」と述べていたが、これは中級クラスの授業科目の選択方法、あるいは、初級クラスから中級クラスへの橋渡しの科目として設けた「文法C」の授業内容を学生がよく理解できていなかったためだと思われる。「文法C」は2013年度前期から新たに受講できるようになった科目で、学生への周知が不足していたようである。オリエンテーション等での周知に努める必要がある。最後に、授業時間帯については、「専門の時間割がわからないのでこたえられない」という回答が最も多かった。午前と午後では午前を希望する学生のほうが若干多かったが、午後に希望する学生も一定数いた。

## 8 おわりに

2013年度からこれまで日本語研修コースの学生のみを対象としていた中級クラス「文法C」、「漢字」を日本語課外補講の学生も受講できるように変更した。これによって、長年中級クラスの課題となっていた、受講者の日本語の習熟度や専門分野によるニーズの違いへの対応を一步進めることができた。大学として留学生の受入れを推進する中、日本語課外補講では今まで以上に多様な留学生への対応が求められることになるだろう。今後も継続的に授業アンケートを実施して学生のニーズの把握に努めるとともに、ほかの日本語プログラムとの調整を図りながら、より良いコース運営のありかたを探っていきたい。

# 総合日本語コース報告（2012年10月～2013年9月）

濱田美和

## 1 はじめに

総合日本語コースは、日本語・日本文化研修留学生のために、2004年10月に開設した日本語プログラムである。富山大学の外国人留学生全体の中で、日本語・日本文化研修留学生の占める割合は低いため、本コースの授業科目はいずれも日本語課外補講上級クラスとの合同授業として開講している。2005年9月に、初めて本コースの修了生を送り出し、2012年10月に9期目の学生を迎えた。

以下、2012年度秋期（2012年10月～2013年3月）及び春期（2013年4月～9月）の総合日本語コースの実施状況について報告する。

## 2 受講学生

### 2.1 日本語・日本文化研修留学生

「2012年度富山大学日本語・日本文化研修留学生プログラム」に参加した学生は3人で、その学生は秋期、春期ともに総合日本語コースを受講した。学生の出身国はロシア2人、韓国1人で、所属は全員人文学部である。

総合日本語コースの授業科目として、2012年度は秋期と春期、各期9科目を提供した。総合日本語コースの授業科目は必修科目ではないが、本学の日本語・日本文化研修留学生プログラムの修了要件の一つとして、学部や教養教育の授業科目及び総合日本語コースの授業科目の中から各期8科目以上の履修が義務づけられている。2012年度の日本語・日本文化研修留学生の総合日本語コースの受講状況は、9科目（秋期4、春期5）が1人、8科目（秋期4、春期4）が1人、1科目（秋期1）が1人だった。

### 2.2 協定校からの短期留学生

総合日本語コースは、日本語・日本文化研修留学生のために開設した日本語プログラムであるが、2006年10月より、本学との学術交流協定に基づく短期留学生も総合日本語コースに参加可能となり、上級レベルの日本語力を有する短期留学生は総合日本語コースを受講している。短期留学生については、留学期間が1年の学生と半年の学生がいるため、期ごとに受講状況を述べる。

受講者数については、秋期は11人で、出身国別の内訳は、韓国と中国各5人、ロシア1人、所属別の内訳は人文学部6人、人間発達科学部3人、経済学部と人文科学研究科が各1人だった。春期は5人で、出身国は全員が中国、所属別の内訳は人文学部3人、人間発達科学部と人文科学研究科が各1人だった。

履修科目数については、秋期は4科目が3人、3科目が2人、2科目が3人、1科目が3人、春期は4科目が1人、3科目が1人、2科目が2人、1科目が1人だった。

## 3 担当者

秋期は1人のセンター専任教員（濱田美和）、及び、6人の謝金講師（高島智美、中河和子、永山香織、藤田佐和子、松岡裕見子、要門美規）、春期は1人のセンター専任教員（濱田美和）、及び、7人の謝金講師（飯野令子、高島智美、中河和子、永山香織、藤田佐和子、松岡裕見子、要門美規）が授業を担当した。いずれの期も、センター専任教員の濱田美和がコーディネーター及び日本語・日本文化研修留学生の履修管理を行い、短期留学生の履修管理についてはセンター専任教員の加藤扶久美が行った。



## 4 スケジュール

秋期は、2012年10月10日(水)～2013年2月8日(金)を授業期間とした。12月25日(火)～1月4日(金)は冬季休業、1月18日(金)は大学入試センター試験準備日のため、休講とした。また、曜日調整のため、11月22日(木)は金曜日、1月16日(水)は月曜日の授業を行った。

春期は、2013年4月8日(月)～7月26日(金)を授業期間とした。曜日調整のため、5月1日(水)と7月16日(火)は月曜日の授業を行った。

学期ごとに、日本語・日本文化研修留学生に対しては濱田美和が、短期留学生に対しては加藤扶久美がオリエンテーションを行った。オリエンテーションの実施日は、秋期は2012年10月2日(火)、春期は2013年4月3日(水)である。オリエンテーションでは、学生に各授業科目の目的、理解達成目標、授業計画等を掲載した授業概要の冊子(授業概要は留学生センターホームページ上にも掲載、Web版は日本語、英語、中国語の3言語での閲覧が可能)を渡し、コースの内容、各授業科目の詳細について説明を行った。春期のオリエンテーションでは、履修の際の参考となるよう、秋期の学業成績通知書を学生に渡している。履修登録は、授業開始後1週間以内に行い、履修登録を行った授業科目について学期終了時に成績を出すシステムとしている。

## 5 授業内容

総合日本語コースは、上級レベルの日本語課外補講の授業と合同で授業を行っているが、日本語課外補講は成績評価が必要でないため、授業科目によっては必要に応じ、総合日本語コースの受講者だけに別課題や試験を課すなどの方法を取っている。科目別の授業概要は表1の通りである。いずれの科目も秋期と春期で同一の授業概要(目的)となっているが、秋期に履修した科目を春期に続けて履修できるように、授業で取り上げるトピックやタスクの内容は期ごとに変えている。

表1 総合日本語コース授業概要(2012年10月～2013年9月)

授業科目名 (開講曜限)	担当	授業概要
秋期：読解A2 春期：読解A1 (火曜4限)	藤田	評論、解説、エッセイなどの情報素材の読解を通して、大学での学習や研究に必要な日本語読解能力を身につける。日本語能力試験受験対策もあわせて行う。
秋期：読解B2 春期：読解B1 (水曜2限)	永山	留学生に必要とされる専門書、論文の読解能力の育成を目指し、教養書、新聞記事等日本での学生生活で出会う様々なテキストタイプの読み物(日本人向けに書かれたもの)を扱う。それぞれのタイプの読み物の特徴となる基本的な構造、文体等を把握し、それに慣れる手立てを見つかる。
秋期：文法2 (木曜4限) 春期：文法1 (金曜2限)	要門 (秋期) 飯野 (春期)	大学での学習、研究生活に必要な上級レベルの文法・表現(時を表す表現、接続表現、文末表現など)を、実践的な演習を通して習得する。日本語能力試験受験対策もあわせて行う。
秋期：作文2 春期：作文1 (火曜3限)	松岡	論理的な文章を書くために必要な構成、表現、文法の基本を学び、学習した項目を用いてまとめた文章を書くことで、レポートや論文を書く力をつける。文章を書く練習はコンピュータを使って行い、ワープロ文書でのレポート作成方法も同時に学ぶ。
秋期：聴解2 春期：聴解1 (木曜3限)	要門	大学で講義を聞いたり、演習や研究会に参加したりする際に必要な聴解力や、日常生活に必要な聴解力を身につけるために、様々な種類の聴解練習を行う。日本語の聴解教材とあわせて、テレビやラジオ、インターネットなど、様々なメディアを用いた練習を行う。
秋期：会話2 春期：会話1 (火曜2限)	松岡	ロールプレイ等での会話練習を通して、大学生活や日常生活で出会う場面や状況での会話力を伸ばす。また、人や物、経験など様々なトピックについて日本語で的確に説明・描写する力、意見や感想を述べる力を養う。



秋期：漢字2 春期：漢字1 (月曜3限)	高畠	日常生活や大学の講義で用いられている漢字・漢字語の意味を理解し、正しく読み、使う力を身につける。学生一人一人のレベルに応じたテキスト（『漢字1000PLUS INTERMEDIATE KANJI BOOK』Vol.1, Vol.2（凡人社）等）を用い、大学での学習、研究生生活に必要な漢字を習得する。
秋期：表現技術2 春期：表現技術1 (月曜2限)	濱田	目上の人や初対面の人とやりとりする、あるいは、不特定多数の人に対して情報発信する際に必要となる、フォーマルな場で用いられる日本語の表現、日常的・実用的な文章の書き方、日本語での口頭発表のスキルを習得する。
秋期：日本文化2 春期：日本文化1 (水曜3限)	中河	留学生として日本社会を分析する試み（情報の読みとり、整理など）をTV番組、新聞・雑誌記事、自治体広報などの様々なメディアを用いてする。日本社会を読み解くための身の回りのリソースを活用する手だてを与え、そこから得たものを日本語で発信する力を養成する。

\*1限8:45～10:15, 2限10:30～12:00, 3限13:00～14:30, 4限14:45～16:15

なお、学生による授業評価アンケートは、日本語課外補講上級クラスとまとめて実施した。授業評価アンケートの結果については、日本語課外補講報告の7 授業評価を参照いただきたい。

## 6 成績評価

成績評価の方法については、成績評価の基準を授業概要に明記するとともに、オリエンテーションでも説明している。この基準をもとに授業担当者が、優(80点～100点)、良(70点～79点)、可(60点～69点)、不可(59点以下)で判定を行うが、総合日本語コースの授業科目については単位が出ないことになっている。

日本語・日本文化研修留学生への成績の通知は、9月の日本語・日本文化研修留学生プログラムの修了時に、成績を記した履修証明書の発行を留学生センター長名で行った。短期留学生へは「学業成績通知書」を加藤扶久美が作成し、学期ごとに通知した。なお、人文学部については、学部長名で「富山大学人文学部短期留学生プログラム」に基づき、履修証明書が発行されている。

## 7 学生からの評価

前述の通り、各授業科目に関する授業評価アンケートは日本語課外補講とまとめて実施し、これ以外に、日本語・日本文化研修留学生に対しては、総合日本語コース全体についてはインタビュー調査（実施日：2013年7月30日(火)、31日(水)、8月7日(水)、調査対象：2012年度日本語・日本文化研修留学生(3人))を行った。この結果を表2に示す。

表2 総合日本語コース（日本語・日本文化研修留学生）インタビュー調査結果

1. 総合日本語コース： 科目について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・十分だった。(2人)</li> <li>・専門の授業科目や教養教育「日本事情」で間に合ったので、先輩から総合日本語コースの授業は単位が出ないときいていたこともあり、日本語の授業はあまり取らなかった。</li> </ul>
2. 総合日本語コース： レベルについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ちょうどよかった。特に、表現技術の授業は役に立って、良かった。</li> <li>・最初は難しかったが、だんだん慣れてきた。</li> <li>・N2レベルの学生向けの授業が多くて、N1に合格した学生にとっては適さないのではないかと思い、日本語の授業はあまり取らなかった。</li> </ul>
3. 自身の日本語力について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初は、日本語で言いたいことが言えるかどうか、自然な日本語が話せているかどうか気がなっていたが、この心配が半年経つと、だんだんなくなってきた。照れずに日本人と話せるようになったことが、留学して、一番力がついたと思うところだ。また、専門の先生に答案を出したら、字が上手になったとほめられた。書く力もついたと思う。ただ、自分の意見をちゃんと伝える力はまだ弱いと思う。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語能力，特に読解の力が伸びたと思う。富山に来た頃は，日本語のテキストがすごく長くて，見るとときどきしていた。今1年前の私を思い出すと，ちょっとだけ日本語能力が上がったと思う。読解だけとは言わないが，聴解，会話は自分自身ではよくわからない。しかし，日本人が話す内容は，前よりもわかるようになった。</li> <li>・周りの日本人の友だちのおかげで，富山弁が聴き取れるようになった。それから，漢字を書く力が伸びたと思う。専門の授業で，毎週ニュースを読んで，要旨を書く授業があったので，難しいと思っていた漢字も書けるようになった。</li> </ul>
4. 富山での留学生活について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・富山大学に留学してびっくりしたのは，先生方が留学生のためにいろいろな活動を整えてくれていたことだ。特に，人文学部の旅行がとても良かった。富山は，自然，特に立山があるのが素敵だと思った。ただ，富山の暑さにはちょっと困った。</li> <li>・富山の生活はとてもよかったが，冬はとても寒かった。外は寒くないが，部屋の中が寒くて困った。大学生活はとてもよかった。日本に来て自分で生活して，好きな日本語も習いながら，楽しい生活だったと思う。日本人の友だちもできた。東京に住まなくても，日本は生活の便利さが高いので，富山でも全部できる。東京よりお金もかからない。</li> <li>・富山には，同国人があまりいないため，ほかの地域に留学した場合にあまり回って来ないようなイベントにも多く誘ってもらい，いろいろな経験ができた。母校と交流協定を結んでいる日本の大学の中で，富山大学は留学生向けの授業が組んであって，専門も難しいので，富山大学に留学した学生は一目置かれる。大変だが，その分富山大学ではいろいろなことが勉強できる。</li> </ul>

2.1に示したように，日本語・日本文化研修留学生3人のうち，2人は各期4～5科目受講していたが，1人は秋期に1科目受講しただけだった。1科目のみ受講した学生は日本語力がかなり高く，インタビューの中でも，専門や教養教育の科目で対応できたので，総合日本語コースの授業はあまり受講しなかったと述べている。このように，高度な日本語力を有している学生へは専門の科目等の受講を勧め，総合日本語コースでは日本語力がまだ十分でないために専門の科目を多く受講するのが困難な学生を主な対象とするのが望ましいと思われる。総合日本語コースの科目を多く受講した学生からは，コースの日本語の科目は十分だった，レベル的にもちょうどよかったという意見が聞かれ，概ね満足している様子が見られた。

## 8 おわりに

総合日本語コースは，当初は日本語・日本文化研修留学生を対象として開設したプログラムであるが，年々，人文・社会系の短期留学生の受講が増加している。今後，コース内容をよりよいものにするためには，短期留学生への対応が鍵になるものと思われる。そのためには，たとえば，現在，日本語・日本文化研修留学生を対象に行っているコース修了時のインタビュー調査を，短期留学生へも広げるなどして，短期留学生の現状を詳細に把握していくことが必要である。

# 日韓共同理工系学部留学生プログラム報告 (2013年4月～2014年3月)

副島健治

## 1 はじめに

1998年の日韓首脳会議における「21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」の構築の合意に基づき、具体的な行動計画として「日韓共同理工系学部留学生事業」が立ち上げられた。この事業は、韓国で選抜された高校卒業生を、留学生として日本の国立大学の理工系学部が受け入れるプログラムである。1999年に第一期生の募集が開始され10年間の第1次事業を経て、2009年の募集から新たな第2次事業が行われている。富山大学はこれまでにこのプログラムに基づく留学生（以下、「日韓生」とする）をのべ9人受け入れた。

## 2 2013年度の本事業による富山大学への学生配置について

富山大学への2013年度の日韓生の新たな配置はなかった。

## 3 富山大学配置の在籍日韓生

これまでに、第7期生までの7人が本学の理学部・工学部から巣立って行った。2013年度における本プログラムの学部在籍者は第10期生2人（理学部4年生1人，工学部4年生1人）である。

## 4 日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討ワーキング

### 4.1 構成員

本学における日韓共同理工系学部留学生事業による日韓生の受入れのための準備と円滑な遂行のために「日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討ワーキング」(以下、「日韓WG」とする)が2001年4月に立ち上げられ、メンバーの交代を経ながら現在に至っている。

2013年度のメンバーは倉光英樹（理学部，日韓WG座長），柿崎充（理学部），飴井賢治（工学部），バハウ・サイモン・ピーター（留学生センター※），副島健治（留学生センター※），朝野真（学生支援グループ留学支援チーム）で構成されており，副島がコーディネーターを務めている。（※留学生センターは2014年10月より「国際交流センター」に改称。）

### 4.2 日韓WGのミーティング

2013年度は以下のように，日韓WGのミーティングが2回持たれ，日韓共同理工系学部留学生事業による日韓生の本学受入れ等について話し合われた。ミーティングにはWGのメンバーの他，2013年度の「日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア」参加者も加わった。

○第42回（2013年度第1回）日韓WG ミーティング

日時・場所：2013年7月16日（火）13:00 学務部会議室（五福地区・共通教育棟1階）

○第43回(2013年度第2回)日韓WG ミーティング

日時・場所：2013年11月5日（火）16:30 学務部会議室（五福地区・共通教育棟1階）

### 4.3 その他の活動

韓国ソウルで開催される「日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア」への参加教職員と日韓WGのメンバーの一部および韓国人ボランティア学生(交換留学生等)での打ち合わせを行った。

日時・場所：2013年7月18日(木) 12:20 場所：留学生センター長室

## 5 日韓共同理工系学部留学生事業協議会

本事業参加の国立大学の全国協議会が、2012年度は下記の日時・場所で開催された。本学からはWGメンバーの飴井賢治と副島健治が参加した。

日時：2013年6月19日(水) 13:00

場所：静岡市産学交流センター

## 6 日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア

本事業の筆記試験合格者とその保護者および関係者を対象として、下記の日時・場所で日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア(以下、「フェア」とする)が開催された。このフェアには、日本の33の国立大学が参加した(資料展示のみの6大学を含む)。

本学からは柿崎充(理工学研究部理学系)、飴井賢治(理工学研究部工学系)、佐々木恒大(理学系支援グループ)の3人の教職員が参加し、現地雇用の通訳に加え、韓国人学生4人(本学経済学部2年生と国民大学校からの交換留学生および元留学生)もボランティアとして手伝った。

日時：2013年9月1日(日) 9:30~17:00

場所：大韓民国国立国際教育院(韓国Seoul特別市鐘路区東崇洞181)

午前中、全体に対する説明会等が講堂で行われた後、午後、本事業の採用候補者を対象として各参加大学のブースにおいて説明が行われた。

本学のブースへは15人の訪問があり、その他数名に資料配布を行った。

## 7 おわりに

本事業は1999年より10年計画で開始され、現在も「第2次事業」として継続されている。日韓生を受け入れようとする日本の国立大学は、自大学が進学希望大学として選ばれるように努力しなければならないが、そのためにできることはそれほど多くはないものの、前述のフェアがその努力すべきほぼ唯一の機会となっている。そして現実としては、日韓生候補生の進学を希望する日本の大学は、ネームバリューのある大学に集中しがちで、日韓生の配置はおのずとそのような大学に偏る傾向がある。

2013年度のフェアに本学としても参加するかどうかについては、7月の第2回国際戦略本部教育部会で諮られ、参加することが決まった。それを受けて、フェアに実際に行く教職員と日韓WGが主体となり、日韓生の配置が得られるようでき得る努力はしたが、結果として配置はなかった。

日韓生配置のための努力の成果がなかなか上がらないことおよび費用対効果の観点からも、学内においてフェアへの参加についての疑問の声もあがり始めており、現状はきわめて厳しいと言わざるを得ない。富山大学の全学的な意思として、今後どのように舵を切るか決断すべき時期なのかもしれない。もし、富山大学が全学的合意をもって、今後も日韓生の配置を目指すとするならば、理学部あるいは工学部だけにかかる問題としてではなく、大学としての国際戦略の観点から富山大学の将来像を見据えた全学をあげての取り組みが望まれる。

# 日本語学習支援サイトRAICHO報告 (2013年4月～2014年3月)

濱田美和

## 1 日本語学習支援サイトRAICHOの概要

「日本語学習支援サイトRAICHO」(以下、「RAICHOサイト」, <http://raicho.ier.u-toyama.ac.jp>)は、富山大学に在籍する留学生の日本語学習を総合的に支援するための一つの手段として、国際交流センターが運営しているサイトである。本サイトのねらいは、富山大学で学ぶ留学生の学習を支援するという点にあり、ターゲットを富山大学の留学生に限定することで、サイトに掲載する情報を絞り込み、利用者が必要な情報に容易にアクセスできるようにするという点に重点をおいている(ただし、サイト自体は学内外を問わず利用できる)。本稿では、RAICHOサイトの2013年度の整備状況について報告し、今後の展望を述べる。

## 2 2013年度RAICHOサイト整備状況および利用状況

2013年度は、2012年度より作成を進めていた「日本語自己学習」コンテンツの初級レベルの語彙、および、動詞・形容詞の活用形や助詞などの基本文法の確認練習のための問題群を完成させ、4月に公開した。しかし、7月にRAICHOサイトのサーバにセキュリティ上の問題が見られたためにサーバを停止する事態となった。その後、対応策の検討を行った結果、今後も継続的にRAICHOサイトを運営していくためにはサーバの移設が最適であるという結論に達し、7月中旬から11月末までRAICHOサイトの運用を停止し、データの移行作業を行った。この停止期間中に、10月に留学生センターを改組して新たに国際交流センターが設置されたことによって変更が必要になったRAICHOサイト内の記載事項を修正する作業もあわせて行った。2013年度はサーバの移設のために半年近くRAICHOサイトが運用できず、移行作業にもかなり労力を要したが、移設後は従来よりもサーバ管理が容易になり、維持費用も大幅に削減できた。また、RAICHOサイトの停止期間中には、学内外の利用者から再開を求める声が聞かれ、様々な形でRAICHOサイトが利用されていることを確認する機会ともなった。

「日本語自己学習」コンテンツはユーザ登録をすることによって、利用者が自身の解答履歴を参照できるようになっているが、2013年4月から2014年3月までの1年間に新たに117人がユーザ登録をしてこのコンテンツを利用している。

## 3 今後の課題

2013年度は、2で述べたように、サーバの移設作業と国際交流センターの設置に伴うRAICHOサイトの掲載内容の見直しに時間を要したが、これによって、サーバの管理が容易になり、古い情報を整理することができたという利点もあった。これまでRAICHOサイトのコンテンツは日本語教育担当の専任教員が中心となって作成してきたが、コンテンツ作成能力のある教員の転出や専任教員の業務増加によって、新たなコンテンツを作成することが以前よりも困難になってきている。継続的にコンテンツを作成していくための体制作りを検討していくことが必要である。



### 3. センター関連行事等（2013年4月～2014年3月）

#### 留学生センター（2013年4月～9月）

2013年

- 4月2日(火) 学部新入留学生のためのオリエンテーション  
前期日本語プログラム講師ミーティング
- 4月3日(水) 春期総合日本語コースオリエンテーション（日本語・日本文化研修留学生）  
前期短期留学生オリエンテーション
- 4月4日(木) 前期日本語課外補講オリエンテーション  
第28期日本語研修コース学内公募選考（試験・面接）
- 4月5日(金) 第28期日本語研修コースオリエンテーション  
学部オリエンテーション（新入生に対する「留学生センター」概要説明）  
学部新入留学生のための時間割作成オリエンテーション
- 4月8日(月) 日本語研修コース開講式
- 4月10日(水) 新規来日留学生(非正規生)のためのオリエンテーション
- 6月14日(金) 日本語研修コース「私の国」発表会
- 6月19日(水) 日韓共同理工系学部留学生事業協議会
- 6月26日(水) 富山県留学生等交流推進会議総会（座談会司会）
- 6月28日(金) スタディエクスカーション
- 7月8日(月) 第1回留学生センター運営委員会
- 7月16日(火) 第1回日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討WGミーティング
- 8月3日(土) 日本語研修コースホームビジット
- 8月5日(月) 第28期日本語研修コーススピーチ発表会（「私の専門」発表会）
- 8月23日(金) 学務部インターンシップ学生の留学生センター見学・研修
- 9月1日(日) 日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア
- 9月25日(水) 第28期日本語研修コース修了式

#### 国際交流センター（2013年10月～2014年3月）

2013年

- 10月1日(火) 後期日本語プログラム講師ミーティング
- 10月4日(金) 秋期総合日本語コースオリエンテーション（日本語・日本文化研修留学生）  
後期短期留学生オリエンテーション
- 10月7日(月) 第29期日本語研修コースオリエンテーション  
後期日本語課外補講オリエンテーション
- 10月8日(火) 第29期日本語研修コース開講式
- 10月9日(水) 新規来日留学生(非正規生)のためのオリエンテーション
- 10月11日(金) 第1回国際交流センター運営委員会
- 10月22日(火) 第2回国際交流センター運営委員会（電子メールによる持ち回り審議）  
～10月29日(火)
- 10月22日(火) 第1回国際交流センター運営委員会留学生奨学金等専門委員会、  
および第1回五福キャンパス部会
- 11月5日(火) 第2回日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討WGミーティング
- 11月22日(金) スタディエクスカーション



- 11月26日(火) 第3回国際交流センター運営委員会  
12月13日(金) 第2回国際交流センター運営委員会留学生奨学金等専門委員会,  
および第2回五福キャンパス部会  
12月14日(土) 日本語研修コースホームステイ  
～12月15日(日)  
12月20日(金) 第29期日本語研修コース「私の国」発表会  
12月26日(木) 第4回国際交流センター運営委員会

2014年

- 1月30日(木) 第5回国際交流センター運営委員会  
2月3日(月) 第3回国際交流センター運営委員会留学生奨学金等専門委員会,  
および第3回五福キャンパス部会  
2月11日(火) マーレイ州立大学短期留学プログラム  
～3月16日(日)  
2月19日(水) 第29期日本語研修コーススピーチ発表会(「私の専門」発表会)  
2月21日(金) 第6回国際交流センター運営委員会  
2月24日(月) 第4回国際交流センター運営委員会留学生奨学金等専門委員会  
3月1日(土) ニュージーランド短期英語研修プログラム  
～3月29日(土)  
3月3日(月) 第29期日本語研修コース修了式  
3月25日(火) 第5回国際交流センター運営委員会留学生奨学金等専門委員会,  
および第4回五福キャンパス部会

## 外国人留学生と地域との交流状況（2013年度）

No.	行事名	開催日	主催団体名	参加人数 (留学生)
1	2013女子留学生日本語弁論 富山県大会	7月13日（土）	WFWPとやま	5
2	ゆかた着付け教室	7月21日（日）	富山市民国際交流協会	4
3	ワールドフェスタ イン みどり野	7月25日（木）	富山県立新川みどり野高校	3
4	富山まつり おわら踊りで参加	8月3日（土）	富山市民国際交流協会	4
5	国際世界遺産セミナーユース プログラム	8月24日（土） ～27日（火）	国際世界遺産セミナー 実行委員会	2
6	料理交流会	8月28日（水）	富山市民国際交流協会	3
7	国際交流フレンドリーin婦翔会	10月20日（日）	富山県婦翔会	20
8	ポートルラムと運河クルーズ	11月4日（月）	富山市民国際交流協会	11
9	国際交流フェスティバル (各国のブース担当, 踊り, カラオケ)	11月10日（日）	国際交流フェスティバル2013 実行委員会	58
10	留学生ホームビジット	11月23日（土）	富山県婦翔会マロニエの会	3
11	留学生との交流会in婦中	12月8日（日）	富山県婦翔会婦中町支部	3
12	留学生ホームステイ	1月4日（土） ～13日（月）	富山県婦翔会	4
13	2014新春国際交流のつどい	1月19日（日）	富山市民国際交流協会	6
14	ボーリング交流会	2月9日（日）	富山市民国際交流協会	11
15	留学生との交流会「ひな祭り」	2月26日（水）	WFWPとやま	6
16	料理交流会（お雛さま）	3月4日（火）	富山市民国際交流協会	1

## 4. センター教員等担当業務（2013年4月～2014年3月）

2013年10月に、留学生センターを改組して新たに国際交流センターが設置された。留学生センターではセンター長、副センター長1人、専任教員5人の体制であったが、国際交流センターではセンター長、副センター長2人、専任教員5人、コーディネーター1人の体制となった。

### 留学生センター（2013年4月～9月）

センター長	橋爪 和夫（人間発達科学部併任）
副センター長	副島 健治（センター専任教員）
専任教員	加藤 扶久美
	バハウ サイモン ピーター
	濱田 美和
	田中 信之

### 国際交流センター（2013年10月～2014年3月）

センター長	末岡 宏（人文学部併任）
副センター長	西条 寿夫（医学部併任）
	バハウ サイモン ピーター（センター専任教員）
専任教員	加藤 扶久美
	副島 健治
	濱田 美和
	田中 信之
コーディネーター	津田 陽子

2013年度においては、上記構成員で以下の業務を行った。

#### 【コースコーディネーター等】

##### コースコーディネーター

・日本語研修コース	田中 信之
・日本語課外補講	濱田 美和
・総合日本語コース	濱田 美和
・日韓共同理工系学部留学生プログラム	副島 健治

短期留学生担当（紀要報告執筆、オリエンテーション開催、成績管理等） 加藤 扶久美

教養教育「日本語」「日本事情」担当（紀要報告執筆等） 加藤 扶久美

【授業担当】 ㊟：日本語研修コース，㊟補：日本語課外補講，㊟総：総合日本語コース，㊟教：教養教育

	前 期	後 期
加藤 扶久美	㊟㊟初級「聴解」(月曜3限) ㊟㊟初級「文字・漢字」(水曜3限) ㊟初級「特別指導」(月曜4限) ㊟初級「特別指導」(金曜4限) ㊟補初級「生活日本語」(火曜4限) ㊟教外国語科目「日本語A1」(火曜3限) ㊟教総合科目「日本事情II」(木曜2限)	㊟㊟初級「聴解」(月曜3限) ㊟㊟初級「文字・漢字」(水曜3限) ㊟初級「特別指導」(月曜4限) ㊟初級「特別指導」(金曜4限) ㊟補初級「生活日本語」(水曜2限) ㊟補中級「文法C」(火曜1限) ㊟補中級「文法C」(火曜2限)
副島 健治	㊟補中級「文法B」(木曜1限) ㊟補中級「文法B」(木曜2限) ㊟教外国語科目「日本語A1」(金曜2限)	㊟補中級「文法B」(木曜1限) ㊟補中級「文法B」(木曜2限) ㊟教外国語科目「日本語A2」(金曜2限)
バハウ サイモン ピーター	㊟初級「日本事情」(水曜4限)	㊟初級「日本事情」(水曜4限) ㊟教教養科目「異文化理解」(木曜5限)
濱田 美和	㊟初級「コンピュータ」(木曜3限) ㊟初級「特別指導」(月曜4限) ㊟初級「特別指導」(金曜4限) ㊟補中級「漢字」(月曜3限) ㊟補中級「文法C」(火曜1限) ㊟補中級「文法C」(火曜2限) ㊟総㊟補上級「表現技術1」(月曜2限)	㊟初級「コンピュータ」(木曜3限) ㊟初級「特別指導」(月曜4限) ㊟初級「特別指導」(金曜4限) ㊟補中級「漢字」(月曜3限) ㊟総㊟補上級「表現技術2」(月曜2限) ㊟教外国語科目「日本語B4」(火曜1限) ㊟教総合科目「日本事情I」(火曜5限)
田中 信之	㊟初級「文法」(火曜1限) ㊟初級「文法」(火曜2限) ㊟初級「コンピュータ」(火曜4限) ㊟初級「特別指導」(月曜4限) ㊟初級「特別指導」(金曜4限) ㊟教外国語科目「日本語A1」(金曜2限)	㊟初級「文法」(火曜1限) ㊟初級「文法」(火曜2限) ㊟初級「コンピュータ」(火曜4限) ㊟初級「特別指導」(月曜4限) ㊟初級「特別指導」(金曜4限) ㊟教外国語科目「日本語A2」(金曜2限)

【学内委員等】

国際戦略本部会議

橋爪 和夫(4月～9月)

末岡 宏(10月～3月)

国際戦略本部会議教育部会

副島 健治

国際教育センター(仮称)設置準備委員会

副島 健治

大学改革推進本部国際交流部会

末岡 宏

西条 寿夫

バハウ サイモン ピーター

加藤 扶久美

副島 健治

濱田 美和

田中 信之

センター専任教員評価方法検討委員会

橋爪 和夫(4月～9月)

末岡 宏(10月～3月)

留学生奨学金等選考委員会(4月～9月)，国際交流センター  
運営委員会留学生奨学金等専門委員会(10月～3月)

副島 健治

留学生奨学金等選考委員会五福キャンパス部会（4月～9月）	副島 健治
国際交流センター運営委員会留学生奨学金等専門委員会	
五福キャンパス部会（10月～3月）	
五福キャンパス教養教育実施専門委員会	加藤 扶久美
五福キャンパス教養教育FD専門委員会	濱田 美和
国際交流センター運営委員会短期留学プログラムWG	バハウ サイモン ピーター
	津田 陽子
日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討WG	副島 健治
	バハウ サイモン ピーター
日本語・日本文化研修留学生プログラム検討WG	濱田 美和
環境推進員	田中 信之
安全衛生管理者	副島 健治（4月～9月）
	バハウ サイモン ピーター（10月～3月）

【その他業務分担（印刷物等）】

留学生センター紀要	副島 健治
国際交流センター概要	濱田 美和
国際交流センター（留学生センター）ニュース	バハウ サイモン ピーター
	加藤 扶久美
日本語研修コース報告書『らいちょう』	田中 信之
国際交流センターホームページ	副島 健治
	津田 陽子

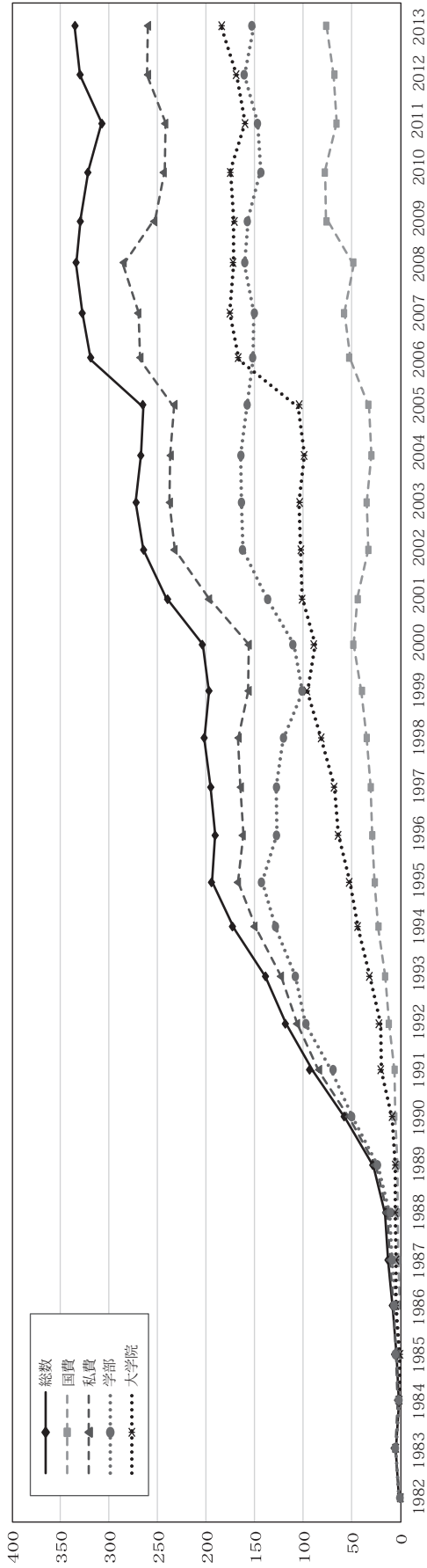




# 資料

- 1 富山大学における年度別外国人留学生数の推移
- 2 富山大学在籍外国人留学生数
- 3 富山大学国際交流センター規則
- 4 富山大学国際交流センター紀要投稿要項

富山大学における年度別外国人留学生数の推移



	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	
総数	2	5	3	4	4	8	13	16	28	57	90	118	139	171	194	191	196	202	197	204	242	265	273	267	265	319	328	334	329	321	308	330	336
国費	1				1	2	3	3	5	6	12	16	23	27	29	31	35	40	48	48	44	33	35	30	32	51	58	48	77	78	66	69	76
私費	1	5	3	4	7	11	13	25	52	84	106	123	148	167	162	165	167	157	156	198	232	238	237	233	268	270	286	252	243	242	261	260	
学部	2	5	2	3	4	9	11	23	49	71	98	108	128	142	127	128	121	101	110	138	162	164	165	158	152	151	161	157	144	147	161	151	
大学院				1	1	4	4	5	8	19	20	31	43	52	64	68	81	96	88	101	103	104	99	105	166	176	172	172	175	160	169	185	
センター																			6	3			5	3	2	1	1	1		2	1		

(毎年5月1日現在)

\*2005年10月に旧富山大学（現五福キャンパス）、富山医科薬科大学（現杉谷キャンパス）、高岡短期大学（現高岡キャンパス）の3大学が統合して現在の富山大学となった。  
 2005年度までは旧富山大学のデータである。  
 \*外国政府派遣と県費は国費に含めた。センターは留学生センター（現国際交流センター）所属の予備教育生を示す。

## 資料2

### 富山大学在籍外国人留学生数（2013年度）

#### 1. 学部別

2013年5月1日現在

		正規生				研究生・科目等履修生				合計
		国費	外国政府	私費	小計	国費	県費	私費	小計	計
学部	人文学部			15	15	3	1	6	10	25
	人間発達科学部			3	3		1	5	6	9
	経済学部		2	10	12		1	13	14	26
	理学部	1		2	3			1	1	4
	薬学部	1			1					1
	工学部	1	44	33	78					78
	芸術文化学部	1		5	6			2	2	8
小計		4	46	68	118	3	3	27	33	151
大学院 修士課程・ 博士前期課程	人文科学研究科			6	6			2	2	8
	人間発達科学研究科			1	1	2			2	3
	経済学研究科	1		27	28			1	1	29
	医学薬学教育部	1		17	18			1	1	19
	理工学教育部			28	28			1	1	29
	芸術文化学研究科			1	1					1
小計		2		80	82	2		5	7	89
大学院 博士課程・ 博士後期課程	医学薬学教育部	5		26	31					31
	生命融合科学教育部(五福)	4		4	8					8
	生命融合科学教育部(杉谷)	2		13	15			2	2	17
	理工学教育部	4	1	32	37			3	3	40
小計		15	1	75	91			5	5	96
<b>合計</b>		<b>21</b>	<b>47</b>	<b>223</b>	<b>291</b>	<b>5</b>	<b>3</b>	<b>37</b>	<b>45</b>	<b>336</b>

#### 2. キャンパス別

五福キャンパス	259
杉谷キャンパス	68
高岡キャンパス	9

#### 3. 国・地域別（計24ヶ国・地域）

中国	194	インド	2
マレーシア	52	タイ	2
ベトナム	20	台湾	2
韓国	18	アルバニア	1
インドネシア	8	ウガンダ	1
モンゴル	6	コンゴ民主共和国	1
パキスタン	5	チェコ共和国	1
バングラデシュ	5	ネパール	1
ロシア	4	フィンランド	1
エジプト	3	ブルガリア	1
カメルーン	3	ミャンマー	1
ブラジル	3	モルドバ	1

## 資料3

### 富山大学国際交流センター規則

平成25年9月24日制定

平成26年6月24日改正

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人富山大学学則第12条第2項の規定に基づき、富山大学国際交流センター（以下「センター」という。）に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、富山大学（以下「本学」という。）の外国人留学生の受入れ及び学生の海外留学に関わる教育・支援を推進し、国際社会で活躍する人材の育成に寄与することを目的とする。

(業務)

第3条 センターは、次に掲げる業務を行う。

- (1) 外国人留学生の受入・支援に関すること。
- (2) 学生の海外留学の支援に関すること。
- (3) 海外学術交流協定校との学生交流に関する連絡・調整
- (4) 外国人留学生と日本人学生の交流推進に関すること。
- (5) 外国人留学生の日本語教育に関すること。
- (6) 外国人留学生のキャリア支援及び就職支援に関すること。
- (7) 卒業・修了後の外国人留学生との連携・支援に関すること。
- (8) 国際交流に関する調査及び研究
- (9) その他センターの目的達成に必要な事項

(部門及び専門部会)

第4条 前条の業務を遂行するため、センターに次に掲げる部門を置く。

- (1) 留学受入支援部門
- (2) 留学派遣支援部門

2 前条の業務のうち特定の業務を遂行するため、センターに専門部会を置くことができる。

(職員)

第5条 センターに次に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 専任教員
- (4) 兼任教員
- (5) 協力教員
- (6) その他必要な職員

(センター長)

第6条 センター長は、学長が指名した者をもって充てる。

2 センター長は、センターの業務を掌理する。

3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、当該センター長を指名する学長の任期の末日を超えることができない。

(副センター長)

第7条 副センター長は、センター長の推薦に基づき、学長が命ずる。

2 副センター長は、センター長の職務を補佐し、センター長が不在又は事故あるときはその職務を代行する。

3 副センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、当該副センター長を推薦するセンター長の任期の末日を超えることができない。

4 副センター長に欠員が生じた場合、後任の副センター長の任期は、前任者の残任期間とする。

(専任教員)

第8条 専任教員は、センターの業務に従事する。

2 専任教員の選考については、別に定める。

(兼任教員)

第9条 兼任教員は、所属長及び本人の承諾を得て、学長が命ずる。

2 兼任教員の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 兼任教員は、センター長の命を受け、センターの業務に従事する。

(協力教員)

第10条 協力教員は、所属長の推薦に基づき、本人の承諾を得て、センター長が指名する。

2 協力教員の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 協力教員は、センターの業務を助ける。

(運営委員会)

第11条 センターに、センターの管理運営に関する事項を審議するため、富山大学国際交流センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

2 運営委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(日本語・日本事情教育プログラム)

第12条 センターは、外国人留学生の予備教育等に必要な日本語・日本事情教育プログラムの実施及び運営を行う。

2 日本語・日本事情教育プログラムに関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第13条 センターの事務は、学務部学生支援課において処理する。

(雑則)

第14条 この規則に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、運営委員会の議を経てセンター長が定める。

附 則

1 この規則は、平成25年10月1日から施行する。

2 富山大学留学生センター規則(平成17年10月1日制定)は、廃止する。

3 この規則施行後、最初に指名されるセンター長の任期は、第6条第3項の規定にかかわらず、平成27年3月31日までとする。

4 この規則施行後、最初に指名される副センター長の任期は、第7条第3項の規定にかかわらず、平成27年3月31日までとする。

附 則

この規則は、平成26年7月1日から施行する。

## 資料4

### 富山大学国際交流センター紀要投稿要項

#### 1 目的

富山大学国際交流センター（以下「センター」という。）は、日本語・日本事情教育，異文化教育，留学生教育，国際交流等にかかる理論的・実践的研究に関する論文，研究資料等を発表するため，富山大学国際交流センター紀要（以下「センター紀要」という。）を発行する。

#### 2 執筆者の資格

- (1) センターの専任教員及び非常勤講師，各学部の留学生担当教員とする。
- (2) 編集委員会が特に認めた者
- (3) (1) (2) の者が筆頭著者となっている共著者については，制限しない。

#### 3 原稿の内容

- (1) 投稿原稿は，未発表のものとする。
- (2) 原稿の種目は，論文，研究ノート（特定の主題に対する研究上及び教育上の提言，史・資料の紹介及び考察，又は萌芽的研究を記したものを指す。），研究資料（実践記録・調査結果，既成の知見の確認等研究上報告する価値のあるものを指す。），実践・調査報告，書評のいずれかとする。

#### 4 原稿の長さ

原稿の長さは，1篇につき，図・表・写真等を含め，原則として刷り上がり20ページ以内とする。

#### 5 原稿の体裁

富山大学国際交流センター紀要執筆要領（以下「執筆要領」という。）に従って，記述する。

#### 6 編集委員会

センター紀要編集のため，センター長を委員長とした編集委員会を置く。

#### 7 投稿手続き

- (1) 投稿カードに所定の事項を記入のうえ，原稿とともにセンター長に提出し，原稿受領書を受け取る。
- (2) 提出された年月日をもって，受付年月日とする。
- (3) 原稿提出締切日は，別途定める。

#### 8 原稿の採否

論文等の採否は，本要項及び執筆要領に基づいて，編集委員会が決定する。

#### 9 発行回数

原則として，年1回とする。

#### 10 その他

- (1) 別刷は，1篇につき30部以内とする。30部を超える場合は，原則として実費負担とする。
- (2) 掲載された論文等の二次利用は，編集委員会に委ねるものとする。ただし，著者は自由に利用で



きるものとする。

付記

本要項の実施は、センター紀要第1号の執筆時から適用する。

---

## 執筆者一覧

---

末岡 宏	富山大学国際交流センター長
副島 健治	富山大学国際交流センター教授
高畠 智美	富山大学国際交流センター非常勤講師
田中 信之	富山大学国際交流センター准教授
バハウ サイモン ピーター	富山大学国際交流センター教授
濱田 美和	富山大学国際交流センター教授

---

### 富山大学国際交流センター紀要 創刊号

---

発行年月 2014年12月

編集・発行 国立大学法人富山大学国際交流センター

〒930-8555 富山県富山市五福3190

印刷所 (株)富士印刷





# Journal of Center for International Education and Research University of Toyama



Preface ..... SUEOKA Hiroshi 1

## **I** Research Papers

HAMADA Miwa, TAKABATAKE Tomomi; Analysis of the Dialogue between  
Learners During Group Work in Kanji Class :  
What kind of questions are asked? What kind of errors are pointed out? ..... 3  
BAHAU Simon Peter; Acculturation of International Students in  
Japanese Universities -The case of University of Toyama- ..... 13

## **II** Annual Reports (April 2013–March 2014)

1. Advisory, Acceptance and Study Abroad Support ..... 21  
2. Japanese Language Program ..... 26  
    Intensive Japanese Course ..... 27  
    Extra-curricular Japanese Language Program ..... 39  
    General Japanese Language Course ..... 53  
    Japan-Korea Cooperative Program for Science and Engineering Students .. 57  
    Japanese Language Support Site RAICHO ..... 59  
3. Schedules ..... 60  
4. List of Staff and the Responsibility of CIER ..... 63  
Data ..... 67

**Center for International Education and Research (CIER)**  
University of Toyama 3190 Gofuku, Toyama 930-8555 JAPAN

リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。